
City of chaos

ブラック?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

City of chaos

【Z-コード】

Z7271M

【作者名】

ブラック?

【あらすじ】

20XX年、日本経済は崩壊した。

政府は解散し、日本は完全なる無法地帯となる。

生き抜くために、武器を握る市民…

撃ち抜かれるのは相手か、己か

【序】

日本国神奈川県某所

狭い路地を男が走る。

「ハア…ハア…」

何かに追われているようだ。

腕には小さな鞄。それを大事に抱えながら、男は走る…。

「ハア…ハア…、」、これさえあればこの国から抜け出せる、抜け出せるんだ…」

男は走りながら咳いた。

路地の向かうに光が見える。そこまで行けば、追手は諦めるだろう。

パンッ

後ろの方から乾いた音がした。

同時に足に走る激しい痛み。

「ぐ…ぎやあああ…?足が…」男は足を押されて倒れた。

抱えた鞄は放り出され、地面を滑つた。

ガツ

突如現れた黒い靴が鞄を押さえつけて止めた。

「はい、確保～」

やる気の無さそつた男の声。撃たれた男が顔をあげると、若い青年が自分に拳銃を突きつけていたのが見えた。

「あ～、わかる？　あんたもひ終わりだよ？」

死んだよつた田をした青年は、痛がる男に咳いた。

「……かつ、金…金ならいへりでも出す…!…命は助け」男が慌てて後ろに逃げよつとすると、何か硬いものが後頭部に当たつた。

「…………」

振り返ると黒光りする銃口　初老の男が銃を構えていた。

「　ヒイ！？」

男は逃げ出そうとするが、

「へえ？　あんたじやあいへり金出すんだい？」

最初の青年に髪の毛を掴まれ、無理やり顔を向けらせられた。

「ぜ…全部だ…!…有り金全部やる…!…」

男はポケットを探り、財布を放つた。ずしりと重い音がある。

「…ふん、もうつていへぜ。」青年は髪の毛を離し、財布を拾つてポケットに閉まつた。

「ハア…ハア…え？」

ひとしきりほつとしていた男は肩で息をしていたが、顔をあげると田の前に黒いものが……

「鞄も金も、お前の命も全部もうつていへ。じゃあな、おつさん？」

ガキンッ

「ちょ……お前…ツ…！」

ズッダアアアン…！」

青年の銃は火を吹いた。

……ザツ

後ろで見ていた初老の男は鞄を拾い上げた。

「……行くぞ……」

「あいよ～」

二人はそのまま路地を出て、行方を眩ませた。

後には死体だけが残された

20XX年、積もりに積もった不良財政を抱えた日本政府は全世界に向け非常事態宣言を発した。

先進国の財政破綻

それは世界的にも類を見ない異常事態だった。

国民の信頼を失い、單なる借金団体と化した政府は民衆の暴動で倒

れ、日本は完全なる無法地帯に変化した。

国外に逃亡する富裕層、国内に流入する膨大な銃火器…。

文字通りの“混沌”だ。^{カオス}

もちろん諸外国の干渉はあった。平和維持と名付けられた、侵略軍は世界各地から日本に送り込まれた。

しかし、軍隊は壊滅した。

民衆たちの激しい抵抗…想像を絶する市街戦…あまりの激しさに軍隊は撤退せざるを得なかつた。

此処に世界で唯一政府を持たない地域が出来た
國名すら無い、【二ホン】と呼ばれる場所…

世界の警察を自負する某経済大国は更なる軍を派遣しようとしたが、世界の批判を浴び、何も出来なくなつた。

対立する諸外国は均衡を保つために【二ホン】を干渉を許さなかつたのだ。

誰も【二ホン】に手出しが出来ない

犯罪組織、マフィア、諜報組織、世界の“裏”を支配する連中は【二ホン】に巣くい始めた。

血で血を洗う抗争、巨大化する企業、無限に広がる無秩序なスラム…

此処を支配するのは“正義”じゃない。

圧倒的な金と暴力だけが力だ。

自らの頭と体しか信じてはいけない世界……

民衆は武器を握り、嘘と裏切りで生活する。

それが【ニホン】……

その中を駆け抜けた強者たちのストーリー。

絶えない銃声、あたりを覆う硝煙の煙

無慈悲な銃弾が撃ち抜くのは、相手か己か

【恋】 Raven Claw (前書き)

本編始まりますよ (。 。)

楽しく読んでもらえれば嬉しいです (、 、 人)

【竜】 Raven Claw

左胸か、若しくは眉間を

確実に狙つて、引き金を引きなさい

そう言つて僕に渡された銃は

何も語らず、冷たく光つていた

(Declarare war)

慈悲深き正義？

(Start war)

(Yes, Sir. Declarare war)

無常？Love & Peace

(Start war)

出典、ポルノグラフティ「敵はどこだ?」より抜粋。

ジリリリリ

……朝らしい。

騒々しい田覚まし時計は、未だに夢から覚めない持ち主を待つていた。

傍らのベッドには、青年が大の字で寝ていた。
寝相が悪いのか、掛けいただろう布団はとうに体に被さつてはいなかつた。

起きあがみの気配は全く無い。

ジリリリリ、ジジジジジ

起きない主に怒鳴るかの様に、田覚まし時計はアラームの音量を一段階上げた。もはや騒音である。

しかし、起きない。

ジジジジジ、ガガガガガ

ついに、音量は最大になった。凄まじい震動が部屋に響く……

しかし部屋の主はうめき声をあげて、寝返りをしただけ……。もともと掛かっていなかつた布団は、更にベッドの隅に押しやられた。

ガガガガガ ガツシャアアン！！

目覚まし時計は自らの震動に耐えきれず、サイドボードから落ちた。盛大な破損音と飛び散る部品。

しかし時計の最後の叫びは持ち主に伝わった。

……ガバッ

流石に無視できない音は、さわやかな目覚め（？）をもたらした。

「……へ？ 何で時計が壊れて…」

かなり鈍い感覚の持ち主らしい。しばらくボーッとしていたが、

「あ～、くそつこれで何回目だよ～。」
やつと状況を理解した様だ。

青年はベッドから降りて目覚まし時計を拾うと、部屋の隅にあるゴミ箱にシュー^トした。

スポーツ、ガツシャアアン！！

見事一発で壊れた時計はゴミ箱に入った。

もちろん、派手な音をたてて、またもや部品が宙を舞う。

「はい、ナイスショウトお～」

（この青年のせいで一体幾つの時計が“ナイスショウトお～”になつたのかは、計り知れない）

「…あれえ？」

：夜にカーテンを閉めきつていたはずの部屋は明るくなっていた。
カーテンを透かして日の光が差し込む

「ふうん、今日も晴れか……」そう言つて、青年はカーテンを無理やり開け放つた。

ザツ！

思つた通りの快晴だ。部屋から見える景色もいつもと一緒に

倒壊したビル街、錆びついた線路と、傾き停止した電車

“いつもの光景”だ。

一通り外を見渡すと、満足したかの様に、青年は深呼吸し、窓に背を向けた。

そしてサイドボードに置いてあった古びたリモコンを手に取り、テレビを付けた…

テレビはつかないよつだ。勘にさわる磁氣音が流れる。

「……オンボロめ、これでも食らえー。」

青年はベッドの上に放置してあった水入りペットボトルを、テレビに投げつけた。

ザーニー、ガツ、バチツ

ペットボトルはテレビを側面を強打し、テレビは人らしき影を映し始めた。

「 はつ、俺つて天才だぜ。」 (いずれテレビも田観まし時計と同じ運命をたどるだろ(づ)

影はだんだんと形をなし、女性のニュースキャスターの姿に変わった。

白人のニュースキャスターだ。

「OK? Next news from mid east Asia . Many people.....」

滑らかな英語が流れれる。

「 」

青年は鼻歌を歌いながら、冷蔵庫を開け、サンドイッチの朝食を取り出した。ベッドへ歩きながら、サンドイッチを食べる。挟んであるのはチーズだけだ。

「 ... last night . The president decided that ガガツ we invit... 」

突然、ニュースキャスターの姿が飴細工の様に歪み、雑音が入る。

再びテレビは黒い画面を映し始めた。

「はあ、またかよ...、しょうがない...おりやーーー」

再び青年はペットボトルを投げつけた。

ペットボトルは激しくスピンし、今度はテレビの上部を強打した。

「k...c...-p...c...w...ガンッ！」 ザ————「当たりどじんが悪かつたようだ。完全に砂嵐状態に突入した。

青年は顔をしかめた。

「……お、落ち着け……落ち着くんだ俺……もう一回叩けば……」

そう言つとテレビに近付き、側面に平手打ちをかました。

バシン、バシン！

「ザ————」

効果はないようだ。

更に強く叩いた。

「ザ————、k...p...c...x...t e ...」

性別不明の奇声が漏れ出した。なんとかなりそうだ。

(いける…)

今度は拳で殴つてみた。

ガンガン！

「u n...p...w...ブチッ ザ————」

生き返るかとしていたテレビは息の根を絶たれた。

「……、わっわと直りやがれ！…バギッ！」

青年の我慢は尽きた。

罪もないテレビの側面を強烈な拳が襲つた。

「ザ————、ブチッ、…………。」

効果はないようだ。

むしろテレビは抹殺された。

「…………。」「

青年も沈黙している。

「………… プチッ」

青年の中で何かが切れた。

「 F U C K I T A L L ! ! がらくため ! ! 」

青年はおもむろにパジャマの懷に手を突っ込むと、黒い物体を取り出した。

金属質の輝き、重厚な質感 拳銃だ。

ガキンッ

撃鉄が起こされる。

ズガーン！、ガン！、ガン！、ガン！

青年はテレビに向け容赦なく全弾発砲した。

キン キン キン……

もう銃弾は無いようだ。

薬莢が床を弾く……。

銃弾の餌食となつたテレビは原型を止めていない……
割れた液晶と内部からは、火花と煙が漏れている。

硝煙の臭いが鼻をつく。

「………… あ、」「

青年は落ち着きを取り戻したようだ。

銃を放り投げ、少年は頭をかきむしった。

鉢は鉢し壺を立てて、ベッドへ落した。

「あへんなう！ 今月は壊れた二つもいたのよ！ 二つもまだいいやつだよ。」

ガン、ガン！

… またも銃声ではなく、ノックの音が響く。

「ね～ニ、レーー起きてるか～？ニヤ、銃撃したから起きてるね～。」

「あ～、鍵なら空いてる。入つていいぜ？」
レイとよばれた青年はドアに呼び掛けた。

「んじゃ開けるね」

ズガーンツ！！

ドアが勢いよく開く。入り口に立つ女は、Tシャツに短パン…かな
り際どい出で立ちだ。脇に銃を吊つている。

その体勢を見るに…蹴り開けたらしい。

「はい、おはよー……つてまた派手にやつたねえ……、テレビ。女は早速大穴から煙を出すテレビの残骸に気付いた。

ドアを蹴り開けたことに対する反省はないらしい。

「ちくしょう、ほつといてくれー！それよりドアは蹴つて開けるもん
じゃないって何回言つたらわかるんだ？リン……」

青年は彼女をリンと呼んだ。

「それは聞き飽きたよ。これ買い換えるのにいくらかかるんだろ？
ねえ？クスクス……」

リンは顔にどす黒い笑みを浮かべてニヤニヤした。

かわいい顔が台無しだ……

（それとも黒い方が本性なのだろうか……）

「… はあ…」

レイはベットの端に腰かけると、頭を抱えてため息をついた。

…ふと気がつく。

「リン セウいやなんで俺のところに来たんだ？」

「あ！」

テレビに開いた大穴を覗き込んでいた彼女は何か思い出したようだ。

「“ボス”があんたを呼んでたんだ、あたしすっかり忘れてた。」

全く悪びれずそう言った。

彼女には反省するという気持ちが欠如しているらしい。

「はあ…“ボス”がか…、行かなきやまざいな…」

「あたりまえでしょ？蜂の巣になりたくなかつたら速く来いつてさ。」

「あのボスが言つ」とだ、冗談に聞こえない。

「分かつた、着替えてすぐ行くぜ。」

レイは立ち上がるときには、壁にかけてあつたシャツをとった。

「了解い、んじゃ外で待つてね」

そつまつとコンは部屋から出していく。

「バーン」

ドアを力任せに閉めていった。

衝撃で何かが床に落ちた。

ドアの蝶番…

「はあ…」

再び修理するものが増えた。

そつ惱みながらシャツを羽織る。

身支度が整つたところで部屋を出でていこうとするが、大事なモノを忘れていることに気が付いた。

「いけねつ、商売道具忘れた。」

ベットまで戻る。

青年は放置された金属の塊に手を伸ばした。

拳銃……これがなきや仕事にならない。

その銃身には銘が彫つてあつた。

青年はそれを驚掴みにすると、シャツの裏側のホルダーにねじ込んだ。

「さあて、行きますか」

さつきの蹴りで歪んだらじードアを無理やりこじ開け、青年は出ていった。

青年の名は、神崎 零。

レイと呼ばれる彼は
者だ。

Outlaw…無法

【】 Raven Claw (後輩)

どうだったでしょ？（・・・）

あ…はい…銃とか大好きです（〃〃）テレッ？

これからもガンガン撃たせます？

さて、気になる“ボス”とは……次で出します、（^_ ^）／

感想などもよければ書いてください？？

【弐】 Entry Gates (前書き)

ちわ～（・・・）ブラックす
ガンアクション開始すw

【弐】 Empty Guns

僕の銃口は敵を探していた

敵を 敵を 敵を 敵はどこだ?

決めてくれよ 撃つべき敵を

いつそ撃ってくれよ この左胸を

(Declare war)

慈悲深き正義?

(Start war)

(Yes · Sir · Declare war)

無常か? Love & Peace

(Start war)

出典、ポルノグラフィティ「敵はどこだ?」より抜粋。

神奈川県川崎市北部エリア

“旧”武蔵溝ノ口駅前

ここは数十年前まで川崎北部エリアの中心だったらしい…商業と交通の要衝として。

今は鎧びた鉄の塊となつて横転している電車が、毎日24時間往復し、多くの人がこの地を通り過ぎた

（今じゃ考えられないね）

雨風に晒され赤く鎧びつき、今となつては昔の姿すら思い浮かべられない鉄屑を横目に見ながら、レイは線路に沿つて歩いていた。

（Peaceful age “平穀時代”の遺物なんざ興味ねーなー）

ただの鉄の箱に見えてきたそれから視線を離し、レイは自分が向かっている方向の巨大な建造物を直視した。

“旧”武蔵溝ノ口駅

そう呼ばれているそれも、平穀時代の遺物だった。

川崎の南北エリアの往来と、神奈川と東京を結ぶ交通の要。

平穏時代を生きていた人々の移動の交差点だ。

ここに住んでいればどこへでも行ける 人々は愛着を込めてこの地を「ノクチ」と呼んだ。

“昔”の話だ。

JRとかいう鉄道会社が消滅し、電車は来なくなつた今、交通の要としてはこれっぽっちも重要でない。

それでもこの地に人は残つた。

使われなくなつた駅の施設は人々によつて商いの場として復活した。この暴力と金だけがものを言つ時代で唯一、暴力が押さえられ商業の場 閻市だ。

広い空間だつたはずのバスター・ミナルや、その上の駅前広場、複合商業施設はすべて市場……野菜果物から武器銃弾、挙げ句は命さえも売り買ひされる閻の市場として生まれ変わつた。

「俺あそこあんまり好きじゃないんだよね〜」

隣を歩いているリンに愚痴をこぼした。

「文句言わないでよ。どつかのバカがテレビに全弾撃つたからでしょ?」

朝の一件で、俺の銃の弾薬のストックはなくなつていた。“仕事”に武器を持たずに単なる役立たずだ。敵に殺される前に“ボス”に

血まみれにされるだらつ まつぱらじめんだ。

「はあ～ 仕方がないか…」

俺達は「こちやこちや」とした市場の中に入つていつた。

“旧”武藏溝ノ口駅は3のエリアに分かれている。食料や日用品を売つてゐる比較的に安全な駅前広場。

次にバスター・ミナルエリア。

ここでは燃料、資材、車、などの物資を調達できる。

最後に旧ショッピングモールエリア。

かつて大勢の人々が訪れただらう、複合商業施設群には武器、爆薬、弾薬、その他危なそうなものを売つてゐる。もちろん一番危険なエリアだ。銃声が聞こえない日はない。

俺たちの目的は弾薬調達だから、嫌々ながらもその商業施設のエリアに行かなければならない。

（はらへつたなあ～）

思えば朝食はサンドイッチ一切れ…当たり前に腹が空く。

「お～い？ 広場でなんか食い物買つていいかあ？」
リンに呼び掛けると彼女はこつちを振り返つた。

鬼の様ににらんでやがる……（汗）

「はあ？ あんた遅刻して血まみれになりたいの「ぐうう～」…」
腹の虫がなつた。俺のじやない。田の前にいるリンからだ。

「…あれ～？ はらへつてるのか？」

俺は「一ヤ一ヤしながらコンを見た。

「……クソッ 朝食食べる前にボスから電話もらったんだよ」「リンは顔を赤くして言った。女の子として恥ずかしいのは解るが、その前にその口調は女の子のそれじゃない。」

「んじゃ あ話は早いな。行けぜー」

俺は言い終わる前に回れ右で市場と走った。

「ちよつちよつと待てよー。」「リンが走りながら着いてきた。

市場はターミナルの上、例えて言えばターミナルの屋根に当たる部分が駅前広場だ。

市場には様々な匂いがした。果物の甘い匂い、屋台から香る焼けた肉の匂い。そして“血”の匂い 忘れてはいけない、これは金と暴力の支配するところだ。

どんなに活気がある市場に見えよつとも裏で何をやつているのかは誰も知らない。

(「のリンゴつまそーだな……）

俺が今いるのは、八百屋だ……店頭に結構な量のリンゴを並べている。しかし店員は見えない。店の奥にいるよつだ。

路地の向こうを見ると、何軒か先の屋台でコンがあんまんを買つていた。好物らしい。

買おうか迷つてこる姿は女の子だが、中身が危ないので可愛いとは

思えない。

俺はリングゴに視線を戻した。

（一つくらいならばれるわけないよな）

レイはリングゴの箱から一番甘いのを一つ盗むと、店に背を向け

……

ガチヤツ

「金を払う気がないならその手に持っているものを戻して、ひとつと消えてくれ、零？」

なにか頭に固いものが当たつていた。冷たい感触

頭だけぎりりなく振り返ると田の前に銃口が

「…あ～、わかつたからそれを下ろしてくれ、司？」

こつは八百屋店長……じゃなかつた、情報屋の男、埼山
司だ。八百屋は表の顔だと聞いている。

「零、君は何回万引きすれば気が済むのかな？」

「腹の虫が満足するまでだ。」

埼山はあきれてため息をついた。

「はあ…、とりあえずそれを戻してくれ。」

俺がリングゴを箱に戻すとすると埼山は持っていたリボルバー式の

拳銃を下ろす…

(しめたつ…!)

ザツ…ジヤキツ！

俺はシャツの内側から愛銃を抜いて埼山に向かた。

「ハツ！油断したな？司…」

「あんたどこまでバカなのかな？その拳銃、弾切れなんだろ。」

…

…バレた？

「朝、テレビに全弾撃つたのは誰だったかな？」

ポロツ…ガチヤン

俺は硬直して銃を落とした。

(こいつ何で知ってるんだよ…)

「情報屋をなめてもらっちゃ困るね。よいしょっと…」

埼山は固まっている俺の手からリンクゴをもぎ取ると、しゃがんで俺の愛銃、ベレッタM92Fを拾い上げた。

そして引き金をガチガチ引く…もちろん銃弾は出ない。

「やつぱり弾切れか、バカだねえ」

そう言って埼山は俺にベレッタを投げ返した。硬直からとけた俺は、慌ててそれを受けとる。

ついでに何かが飛んできた リンゴだ。

「情報屋一番の御得意様のあんたなら言つてくれれば一ついりこや
るよ。これで万引き失敗12回目だな？」

埼山はあきれたような笑いを浮かべている。

「13回目さ。間違えるなよ~」

空中でリンゴをつかむとレイはリンゴをかじった。

「おい、レイ？ もう10時だ！ 早くしねえとボスに殺される！！」
振り返ると手にあんぱんの袋… 結局買つたらしい… をもつて手を
振つているリンの姿が遠くに見えた。

レイは自分の腕時計を見て焦つた。

「やべつ、もうこんな時間か~」

「なんかあるのかい？」

埼山が訪ねる。

「ボスが話がしたいだと。たぶん“仕事”だろ？」

「大変だねえ？」

他人事の様に埼山は返した。

「まあな。今度は仕事を頼みに来るわ~。じゃあな、リンゴサンキ

ユ~」

そのままレイは全速力で走つていった。リンゴはいつのまにかなく

なつて いる……もつ 食べた のだろ うか。

零がいなくなつたあと 埼山は 考え事を して いた。

ふと ポケットに しまつ て いる リボルバーを だした。

ガキン

そのまま 撃鉄を 起こし、 引き金を 引く…

…… カチン、 カチン

リボルバーから 情けない 音が 出る…。

本来 情報屋に 銃は 必要ない 無限の 情報こそが 武器だからだ。

しかし、 この 危険な 市場では さすがに 武器を 持たない のでは 死んだ
も 同然だ。

だから 埼山は 常に 銃弾の 入つてい ない 拳銃を 持ち歩く。

銃を 扱えない 埼山が こんない かつい リボルバーを 持つて いるのは、
単に 威嚇だけ が 目的だ。 弹は 要らない。

しかし、 神崎 零 あいつが 銃を 抜いたときの あいつの 日は、 紛
れもなく “殺ル” だつた

いつもの死んだような田じゃない

あいつは確かに自分の銃が弾切れだつて知つてたはずだ……でも……

（あいつは俺を殺す気だつた…）

…ゾクッ

冷や汗が流れ
る。

（何者だよ…あいつ）

埼山はあの一人組がかけていつた方向を仰いだ。

あるいは複合商業施設…武器弾薬の調達工リアだ。

【弐】Envy Guncs (後書き)

～後書き劇場～

零「なんだよ、この後書き」

リン「作者が後書き作るのめんどくから登場キャラに語りせぬひじ
いよ?」

零「へへ、いい加減な作者だな。」

作者「お一人さん遠慮ない罵倒ツスね(汗)」

零「あつ 作者出てきた(笑)」

リン「www あつ そついえば“ボス”を出すんじや…」

作者「あ……忘れた(。 。)」

ジヤキン、ガチャツ!

零、リン「この音は“ボス”……逃げろつー」

ズダダダダダダダダダ…!
ギヤアアアア…

次話に続く w

右を見れど 人は俯き

左を見れども 人は沈み

去りゆく日々は 君に問う

それでいいのかのかと君は問う

やがてまた訪れる 冷たい銀色の世界

ほら 自分見失つていく

君がこの世に生まれてきたことは偶然じゃなくて

無くてはならない人なのです

僕がこの世に生まれてきたことも偶然じゃないと

ここに居ていいと信じたいのです

嗚呼 タ迷えどひた走る

必然の道標 探して

出典、road of major 「偶然といつも必
然」より抜粋。

「で 何が御必要ですか?」

丁寧だが腹黒い感じの声。そいつは黒のスーツを着込み、肘掛け椅子に座っていた。

…レイはこいつがあまり好きではなかった。

こいつの名前は、中田 悠次 武器商人だ。

今俺たちがいるのは、旧武藏溝ノ口駅第三エリア、複合商業施設跡だ。

この物騒な場所に居を構える“エクストラ・オーダー社”の長がこの中田である。

ちなみにエクストラ・オーダー社の本社は外国らしく、中田は支店長という立場。

「あ、あゝ必要なのはベレッタM92Fの弾、数量はいつも通りで。

俺は緊張しながら答えた。

(こいつには簡単に気を許しちゃダメだ…)

「

「了解致しました。ああ、御購入費はちゃんとお持ちですかね?現金以外は御断りですが。」

中田の目が黒く光る。お分かりの通りこいつは金にまみれ。

俺は財布を取り出して中身を見た。

札が数枚…、ギリギリ足りる。

（これ払つたら飯食えないな…）

一瞬躊躇したが、撃てない銃を持つてもしょうがない。銃弾を買つことにした。

「ちやんとあるせー、中田さん。」

「それは結構。金さえあれば銃弾だらうが、機関銃だらうが、戦車だつて御売りしますよ」

若干引きながら、俺は中田に金を押し付けた。

ガツ！ バシッ！

田にもとまらぬ速さで受け取った金を封筒に入れ、引き出しに締まつた。確実に拳銃を抜くより速いだろ？ 「確かにお受け取りしました。」

中田は金をしまつて、背後の扉を開けようとしたが、偶然気がついたよつて言つた。

「私は御注文の品を取りに行きますが、商品庫を見ていいませんか？つい先日新しく入荷したんですよ。」

新しいおもちゃを買つてもらつた子供の様な明るい笑いを浮かべている中田。

「ふうん、少し見ていくかあ

レイは中田に続いて商品庫の中に入つていった。

「ちよ……、中田さんこれどうやって国内に入れたんだよー?」

商品の中には、ありとあらゆる拳銃、機関銃、グレネート、手榴弾、果てには対戦車ライフルまでが無造作に置かれていた。

「私には本社以外にもちょっととしたコネがありましてねえ……」

そう言いながら中田は“DANGER”と書かれた弾薬の箱を『こそじ』をやっている。

（“ちよっとした”って この対戦車ライフルとか米軍のじゃねえか…こっちは中国語とか書いてあるし）

レイはそう考えながら、やたらと漢字が書かれた箱から一丁の拳銃を取り出した。

「それに興味が御有りで？御購入になりますか？」弾薬箱からレイの注文した銃弾を取り出した中田が、レイを見て言った。

こいつの目には商売の事しかないのだろうか…

「い、いや見てただけですよ~」

俺はあわてて、拳銃を箱に戻した。このまま持つていれば、無理矢理買わされるかもしれない…

「金さえあれば何でも売りますよ、何でも。大事なことですから一度言いました。」

銃弾の詰まつた弾倉をレイに渡しながら、中田は黒い笑みを浮かべる。

渡された弾倉はすぐに装填しておいた。

「奥の部屋にもひとつオススメが有りますが、見ますか？」

「あ~、この後仕事なんでもまた今度で」

ここにいたら何を買わされるかたまつたものではない。適当に理由をいって去るべきだ。

「そうですが……ではまたのう利用を。」

中田は残念そうな顔で言った。

「んじゃあ、またよろしく頼みますよ～」

レイは足早に中田の店から出ていった。

「遅かつたね、なんかあったの？」

複合商業施設エリアを出たあたりでリンは待っていた。
(あんまんは既になくなっていた)

「いや～、中田さんいろいろ商品とかなんとか見せられてね～」
レイはうわの空で答えた。

「あの人はいつも商売熱心だからね。」

そう言ってリンは顔をしかめる。この街であいつな好意を持つてる奴はそうもういない。ただ、武器商人としては一流だ。

「……んで、ボスは何時に集合だと言つてたん？」

「時間？それなら一時さ。…………今時間は…………」
そこまで言つてリンは自分の腕時計を見る。

……みるみるリンの顔が青くなつた。

レイは自分の時計に目を落とした。

既に針は11時を過ぎ、15分な なううとしている。

「 や、ヤバい…ヤバいぞ、レイ…！ もう一時を過ぎたの…」
言つやいなや、リンは駆け出した。

「うわ～、まじかよ…、怠ぐとしますか～」
レイも後を追う。

「だいたい、あんたのせいだよつ…？市場よらないで行けば間に合つたじやん！」

リンは走りながら悪態をついた。

「まあね～ でもリンだつてあんまん買つてたよね～
「バツ、バカ野郎。あたしはいいんだよつ！」

2人はビル街の奥へと走つていった。

溝ノ口エリア
とあるビル。

ブラインドを下ろした室内は薄暗い。部屋の中では2人の人間がソファーに座りながら、煙草を燻らせていた…

「あいつら遅いわねー。どこで道草食つてんのかしら？」
淑女的な女性の声が言つた。声とは裏腹に内容が粗野だ。

「…………いつものことだ。必ず来る。遅れてな…」
静かな初老の男性の声が受けた。年季が入つた声だ。

「フフ……お寝坊さんのガキどもには説教をやらないとね…」

チャキ、ガキンッ！

重々しい金属音が薄暗い室内に響いた。

駅前から続く大通り。

二つの影が走り抜けしていく

「あともつりよつと…、レイ！今は何時！？」

先を行くリンは後に続く青年、レイに振り返りざま叫んだ。

「え～、今ちようど11時30分だぜ～」

走りながら教える。のんきな声だ。

「マジかよ！－確実にボス怒ってるぞ」

女性らしからぬ台詞を吐いて、リンは速度を上げた。

ほどなく、目的地のある雑居ビルに、2人は到着した。田指すは二階だ。

走るスピードそのままに2人は階段をかけあがる。

「ハア…ハア…やつとついた。」

肩で息をしながらリンは呟く。

目の前には頑丈な鉄の扉があつた。表札を掛けるべきはずのところには、黒地に“B H I”と白字で印刷されたシールが貼つてあつた。

「この扉の向こうにボスがいるのか～、会いたくねえな」
レイが無責任にぼやいた。

「今日の遅刻はあんたのせいだから、扉はあんたが開けてよ。」
リンが怖い顔でレイをにらんだ。正論なので反論できない。

「はあ～、分かりましたよ。開けりやあいいんだろ。」
そう言ってドアノブに手をかける。

「案外ボスも遅刻してゐるかもな」

リンに振り返り、お気楽な顔で、ドアノブを回しどアを開けた。

「30分くらい遅れたって大目に…」

ガキンツ！

伏せろ！！！！！」

レイはリンの後頭部を押さえて、床に伏せた。

ズダダダダダダダダダダ！――！――！

熱い熱風が一人の頭上を一瞬遅れて、吹き抜ける。

放たれた無数の弾丸は開け放たれたドアの向かうの壁に、無惨な傷を紡ぐ。

「つてえーーー！ なつなんだよこれ！？」

無理やりレイがリンを床に伏せさせたので、彼女は額を床にぶつけたらしい。

「……頭を……頭をあげるな……！」

鉄の暴風は一人の15cmほど上をなぎ払っている。当たればただ

ではない。

ズダダダツ！ キン、キン、キンッ…

「…あら、ずいぶん遅いのねえ？お一人さん？」

部屋の扉の向かうで、女性が仁王立ちになつてゐる。キリッとした顔立ちに、笑みを浮かべてゐるが、放たれる感情にはじす黒い怒りが込められていた。

手にはなんと、MINIMI 軽機関銃が握られていた。

（おいおい、あんなんで撃たれちゃガチで肉片しか残らないぜ）地面に伏せたまま、レイは白い顔で固まつた。

「どこのをつりついてたんだか知らないけど、時間は守りましょうねえ？」

機関銃を構えながら彼女は一人に近づき、しゃがんだ。

「さて、どうしたものかしら？」

彼女の目が一人を見下ろす。淑女的な表情で微笑んでいたが、目が冷たい。

「あ～、ボス？ すまない弾薬の補給に行つてたのさ。そしたら中田の野郎が…」

ガキンッ！

レイの額に硬くて冷たい突起物… つまるところ機関銃の銃口が当たつられていた。

…レイの顔に冷や汗が流れゐる。

「言い訳は無用。」

彼女の顔にはさっきまでの淑女の趣が消えていた。そこにあるのは無表情な殺戮機械だ。

「…お…遅れてすいませんでした…。」

レイは正直に謝った。

まだ死にたくはさらさら無い。

冷や汗があごを伝つて床に落ちた。

ジャキッ

「分かればよろしい。さっさと仕事始めるわよ。」

既に表情は淑女的なものに戻つている。

一人はほっとため息をついた。

そう、彼女こそが神崎 零とリンの“ボス” さとみ 山中智美だ。モデルかと思ひほどの長身をスーツに包んだ姿、漆黒の長髪に口紅を塗つた唇、鋭い眼。どこからどう見ても大手企業の女性重役にしか見えない。

しかし彼女の本質は戦闘狂だ。外国の外人部隊に居たらしく元軍人なのだ。

ちなみに歳は聞かない方が言い。M2重機関銃で肉塊になりたくなければ。

「…さつさと仕事の話をしてくれ…」

初老の男の声がした。

「ああー、来てたのかい？村仲のおっさん。」

床から起き上がったレイは、部屋の中央にあるソファに座る男に気がついた。

「…一時間くらい待つたぞ…」

村仲とよばれた男の前にある灰皿には、待った時間の長さを表すようになに煙草の吸い殻の山が出来ていた。

彼の名前は村仲 理儀。優秀なドライバーだ。口数の少ない、地味な服装をした初老の男だが、腕は確かである。

「あ～、すまねえな、おっさん。」

レイはさすがに謝った。彼はここの一一番の年長者だ。

「…かまわない。お前が自分の仕事をやつてくれればな…」
新たに煙草に火をつけながら、彼は興味がなさそうに言った。

「それで今日の仕事つてなんなのぞ、ボス？」
リンはソファーに座りながら、山中に聞いた。

「ああ、まだ言つてなかつたわね。」

山中は今氣づいたように言つ。

「今回の仕事はある企業から。川崎南部から北部へ行く輸送車から、あるものを強奪してほしいっていう内容よ。」

「あるもの？」

レイが拳銃の手入れをしながら聞く。

「情報よ。大量のメモリースティック。平穏時代のものらしいわ。」

（平穏時代のものか。どうせ今は残らない先端技術のものってか）
銃身の掃除をしながらそう考えた。

「…中身がなんだろうと関係ない。奪つて依頼人に届ければ良いだけの話だ。」

村仲が言つ。

彼は先ほどの煙草を吸い終わり、次の煙草を箱から出すとしながら

箱の中に煙草が一本も入つてないのが分かると、明らかさまに顔をしかめた。

「そういうこと。あんたたち二人が遅れている間にこいつの準備は出来てるわ。そつちの準備ができ次第、行動開始よ。」

そう山中は言いながら、ソファーの向かい側にある「テスクの引き出しを開き、煙草の箱を取り出すと、村仲に放つてやつた。

「…恩にきる…」

初老の男は嬉しそうに受け取つた。すぐさま封を開けて煙草を吸い始める。

「俺はいつでも準備オーケーだぜ、ボス？」

「たいして準備する事は無いわね。」

レイとリンはそれぞれ自分の銃を確かめた。それだけでOKだ。

「そう言つと思つたわ。さあ、こんな仕事さつと終わらせるわよ。」

「

「…「了解つ！」」

男女4人は席をたち、ドアから各自出ていった。

：俺たちの仕事？

俺たちは“奪い屋”

職務内容は人からものを奪うこと。

チーム名は“BHU”

Black Hold Uppers

黒き篡奪者だ

【四】 *Snatch away from them!*

色めきたつ ネオンサイン

汚れた街 行き交う人波

君は明日に 何を見る

君の明日は輝いているか？

TVニュースが繰り返し

僕に投げつける世界

もう 当たり前のことかの様に

僕がこの世に命授かりしは偶然なのですか？

僕がこの世に命授かりしは必然なのですか？

君がこの世に命授かりしは偶然なのですか？

君がこの世に命授かりしは …

出展、road of major 「偶然といつ名の必然」より抜粋。

神奈川県北部川崎地区

“旧”尻手黒川幹線道路。

時は正午。

頭上に上がった太陽は、地上のあらゆるものを見渡していた。

真っ昼間の広い道路の路端にカーキ色の四輪駆動車ハマーが駐車している。

巨大な車体は一車線の道路に乗り出していたが、道路の交通量は極めて少ない。

他の車が幾度か、通り過ぎただけだ。

かつては川崎を縦断し、“工業都市川崎”的基盤となつた大型幹線道路、尻手黒川線はほぼ廃線状態だ。

二十数年前、日本経済が崩壊すると同時に、近代輸送形態の要の石油は、ほぼ国内に入つてこなくなつた。燃料が枯渇した国内では、自動車における活動は出来ないのだ。

からうじて車を動かせる者達、すなわち闇ルートでの入手、巨大企業で独自に海外に、輸入のパイプを持つ団体。あるいは彼らから燃料を奪取したものだけが車という移動手段を使用できる。

現に、ハマーの窓から見えた通過車両は、いかにも輸送会社のものらしいジャンボトレーラーと、チンピラのおんぼろ乗用車が数台だけだ。

ハマーの前後の歩道には、乗り捨てられたのだらつ、あらゆる種類の車両が放置されていた。ほとんどが錆びにまみれているか、解体されて部品の山となつているものばかり。

自動車の墓場だ。

放置車両の隙間にハマーは、目立つ巨大な車体をなんとか隠していった。

「…標的の情報は?…」

ハマーを操る初老の男、村仲はタバコに火をつけながら助手席の女性に尋ねた。

「東柴コーポレーションの輸送トラックよ。依頼人の情報なら午後一時前後に、ここを通過するはずなの。レイ、リン、見逃さないでね?」

依頼内容の書類らしいものを読みながら、助手席の女性、山中は後ろの席に座る2人に呼びかけた。

「あいよー、ボス。標的に護衛とかついてるのかねえ?」「双眼鏡で遙か遠くの路上を見ていたレイは、尋ねた。

「そこまでは依頼人からは知らされて無いわ。でも相手は一流企業よ。護衛つきは間違いないわね。」

「あー、面倒臭つ!」双眼鏡から目を離して、あぐびをしながらレイは文句をいつ。

「大企業からの情報奪取か…依頼人も大企業なのか？」

窓を開けてレイと反対方向を眺めていたリンは、山中に振り返った。

「さあね、匿名での依頼だからそんなの解らないわ。」興味なさげに言い放つ山中。

「絶対大企業だ。まったく、企業同士の対立なんかにあたしらを巻き込まないでほしいよ。」

リンは窓から乗り出したまま、腕組みして呟いた。

…平穏時代が終わりを告げ政府という名の枷が外れた日本では、企業は合体融合を繰り返し巨大な社会組織と化した。

今となつては昔話に語られる“WW2 (World War 2) ”以前の財閥の様な、血縁企業ではない。

法の束縛から解放され、規制もくそもなくなつた日本国内で、企業はそれ自体が異常増殖し“小国家”とも言える異様な支配体制を作り上げた。

国家のさまをなす企業同士の対立は、むしろ国家間の対立に等しい。

強いものが生き残る

世界の国家から数多の動植物までにも当てはめられるこの法則が絶対だ。

所詮この世のことわりとは金と暴力、それらによる支配に過ぎない。

「…必要の無いことには頭を突っ込むな…これが俺達の捷だ…忘れたか、リン?…」暇そうにタバコをくわえながらハンドルに手をかける村仲が呟く。

「ん…わかつてゐよ、村仲のおつちゃん。」神妙な顔でリンは遠くを見つめていた。

：視界の遙か向こうで何かが揺らいだ。

一直線に続く道路の地平線に動くものが見える。だんだんと大きくなる…近づいているのだ。次の瞬間、その動くものの正体がわかつた。

「…………！　車だ！　しかも複数来るッ！」

たしかに見えた。でもリンの肉眼ではこの距離で細かいところまでは分からぬ。

唯一双眼鏡を持つもの…レイを見ると、彼はまだ車を探していた。

「リン〜、ジ〜に見えるんだあ？わかんねえ。」

レイは双眼鏡をあちらこちらに振り回していた。

「南部川崎方面だよ。早く詳細教えな、レイ？」

「ピントがぼやけて…」

ぼやぼやしている間に元のよつた車の姿は豆粒くらくなつた。

「ああーもうー貸しな？レイ！…」

レイの手から双眼鏡をもぎ取ると、再び車らしきものを見てみた。

トラック1台に護衛車3台 中々のスピードでいかに向かって来る。

既に双眼鏡なしでも車種が判つたが、リンの持つ双眼鏡はトラックの荷台のコンテナに、"東柴"のロゴがあるのを捉えた。

"東柴"のロゴ一間違いない、標的だ！！」
双眼鏡にかじりつきながらリンが叫ぶ。

"あらあら、護衛に3台なんて足りると思つてゐるのかしづ。"見張りをリンとレイの二人に任せていた山中は、近づいてくる一団を一瞥すると、呆れたようにいった。

ドゥルルルルン…ガゴッ

"…数など関係ない…質だ…"

アクセルをふかし、ギアを入れ換えながら村仲が咳く。吸つていたタバコを窓から投げ捨てる。

"やつと来たか~、暇だつたなあ"

懐から、拳銃ベレッタM92Fを取りだし、レイは不敵に笑つた。護衛車両で挟んだトラック達は今では近くに迫り、ついにレイ達の乗るハマーの隣を、北川崎方面に走り抜けていった。

"なかなか速いわね…さあ、"野郎共"…狩りの時間よ?"

ドゥルルル…ボンッ！

"…しつかりつかまれ…"

しつかり暖められたエンジンが咆哮を上げる。

ブウンッ ズガアーン！

轟音とともに前方にあつた廃車を吹き飛ばし、ハマーは弾丸の様に発進した。

「…ふん…カー・チョイスなんて久しぶりだな…」

巨大なハマーを操る村仲はニヤリと笑った。

「嬉しそうね。連中相当慌てるみたいよ？」

山中はせつ言いながら田の前に置いてある無線機を指差した。

「…ガガ…不明車両…追跡されている…ザザ…振り切れ…救援…ハマ…ガガ…」

途切れ途切れの会話が雑音に混じつて聞こえていた。この特別製の無線は傍受機能付きだ。相手の会話が簡抜けである。

「ふうん、良い仕事するじゃん、アイツ。」

お気楽な声はレイ。

「これで引きこもりでなきゃ完璧なのになえ～」

ここにはいないうちの悪口を言つながら、レイは窓を開けた。凄まじい風が車内に吹き込む。

「…そう言つな…ヤツにはヤツなりの仕事がある…」

「そうかねえ～」

風の音にかき消されそうな呟きをレイは言つた。

「え～と、トラックの前に護衛1台、後ろに護衛2台かあ。てか、

あつちもハマーあるじゃん。」

吹き抜ける風に田を細めながら、ひとりわ大きい車体に気が付いた。

「…望むところだ…」

村仲はさらに速度を上げる。

「…ガガ…銃器…許可…ザザ…用意…」

無線がいつそつるさくなる。

「物騒なやつらだ、銃用意してるよ?」双眼鏡を手にリンが叫ぶ。最後尾のバンの窓を通して、銃の影が見えるのを彼女は見落とさなかつた。

ガチヤツ、タタタタツ！

バンの後部が開いたと思うとチカチカと銃火が瞬く。乾いた銃声が響いた。

「気が早いのね。撃つてくるなら撃ち返すまでよ。」

山中はそう言いながら、車内の天井のサンルーフを開ける。

ガチャ

ハマーの天井の部分にはなんとM2重機関銃が装備されていた。

「淑女に乱暴な事をする男どもにはお仕置きしなきやね?」
満面の笑みを浮かべながら彼女は引き金を引いた。

ズガガガガガガツ！ダダダダダツ！

護衛車のアサルトライフルとは比べようもない大きな銃声が轟く。

遙かに太い火線が最後尾のバンを貫いた。

車体が飴細工のように引きちぎられ、12.7mm弾が雨あられのごとく叩き込まれた。

ダダダダダッ ズッガアアアン！！

突如被弾したバンはガソリンに引火したのか大爆発を起こし、吹き飛んだ。

「…フフ…殲滅よ。」

明々と燃える炎に照らされた山中の顔は満足げだった。

「いいぞ やつちまえ、ボス！」

リンが意気揚々と叫ぶ。爆発したバンは反対車線までぶつ飛んで火災を起こしていた。ガソリンの燃える匂いが鼻に届く。

（…うわあ、おつかねえ…まさに蜂の巣じゃねえか。）

美しくも残忍な微笑みを浮かべるボスの顔を見上げながら、レイは絶対に山中を一度と怒らせないと誓つた。命がいくつあっても足りない。

最後尾の車両がやられたのに焦つたのか、他の護衛車からも複数の銃火が瞬いた。

タタタタッ！バババババ！

チュンッ、チュンッ！

いくつかの銃弾がハマーのボンネットを襲うが、軽い音と共に火花

を散らして、弾かれた。

「ギャハハハ、そんな豆鉄砲がハマーに効くわけないじゃん！」

下品な声で爆笑しながら、リンが怒鳴る。

無論嘘ではない。ハマーはアメリカ軍の傑作装甲車の民間転用型だ。大した事ではない。

「一両脱落か…あと2両！」双眼鏡で残りの護衛車を見ていたリンはとんでもないことに気付く。

バンが消えたことで、その前を走っていたトラックの荷台が見えるよくなつた。荷台では何人かの男が大きなものをいじくつている。

それは自動車を葬るのにはこなさか過剰な装備だ。

「……ツー？　TOW！　！」

瞬発的にリンは叫んでいた。

兵器史上最強の陸戦兵器、戦車を破壊するために開発された武器TOW対戦車ミサイルがハマーに向けて発射されようとしていたのだ。

いくらハマーの装甲が厚かるうが、あれの前には大した効果はないだろう。

「なんですかー！？」

山中は笑っていた顔を硬直させた。すぐさま重機関銃をミサイル発射装置に向ける。

引き金を引こうとしたところでの、気が付いてしまった。

(… 残弾、0…！?)

景気よくぶつ放し過ぎたらしい。補充の弾倉は後部座席に置いてあるが、山中が陣取るサンルーフからは手が届かない。

バシュツ！

勢いよく何か空を切る。

弾切れの事実に気づいたのと、TOWが発射されたのは皮肉にも同時だった。

至近距離で発射された殺人者は、瞬時にハマーに迫る。その距離20m。

（…やられる…）

山中は死を覚悟して目をつぶつた。

：それは一瞬だった。

何者かが山中の足を掴んで、車内に引きずり込む。

代わりにものすごい勢いで誰かがサンルーフに身を乗り出すのがわかつた。

「 消える。」
「 バアツン！

冷たい咳きと大きな銃声。感情の欠片もないその声は、たしかにレイのものだった。

ガンツ

ズツドオオオオン！！

放たれた拳銃弾は、15mにまで接近したミサイルの先端を貫く。

猛然とミサイルは大爆発し、辺りを火炎が乱舞した。

すかさず山中はレイの足を掴んで乱暴に引きずり下ろす。間一髪、爆炎がハマー全体を覆つた。

開けたままのサンルーフから熱風が車内に吹き込む。

「せつからく助けてやつたのに乱暴だなあ、ボス？」

座席に叩きつけられたレイは顔をしかめて文句を言った。

「バカを言つんじゃないわよ。こうでもしなきゃあなた今ごろ顔面火傷よ？」

呆れながらも山中は内心ほつとしていた。

流石のハマーも対戦車ミサイルの直撃を受けたらスクランプは避け得ない。

何より車外に出ていた山中は消し飛んでいただろう。

（それにしても…）

あの一瞬の事を考えて背中に一筋の汗が流れた。

（至近の距離で放たれたミサイルを拳銃で撃ち落とすなんて…人の技じゃないわね）

神技とも言えるその銃の腕前を称えながらも、その背中に悪寒も感じていた。

（あの一瞬に聞こえた声…レイなのかしら？でも…）

山中の代わりに助手席に陣取り、傍受無線をへらへら笑いながら聞

いている青年とはとても思えなかつた。

「…やつと煙を抜けるや。…」

村仲が無表情でいう。この男だけがTOWを見ても何も動じなかつた。

ブワア！

真つ黒い煙のカーテンからハマーは飛び出す。巨大な車体が陽の下に躍り出た。

今ミサイルで追跡者を排除したと思ったのだろうか、油断していだ護衛車たちは度肝を抜かれる。

「…ザザ…なぜ無事？…拳銃…TOW…ガ…撃ち落とした…馬鹿な…ガガ…」

俄然、無線が騒がしくなる。

無理もない。戦車をも粉碎するミサイルの直撃を確信していたのだ。

「…ガガ…小銃弾でミサイルをおとしただと…？そんな馬鹿な…ザ…」

護衛のリーダーらしい声がひときわ大きく聞こえた。

「それが俺には出来るんだよね～」

体を伸ばしながらレイが間延びした声で呟く。

「うわあ、またあいつらTOWかよ…」

トランクの荷台をうろちゅうする人影をリンの双眼鏡はとらえた。

「今度はしくらないわよ？」

山中は12・7mm弾の弾倉をじつそり持つてルーフに上がつとした。

「ちょっと待てよ、ボス？」

リンは振り返つて山中を引き留めた。

その顔には黒い笑いが…。

「あんな奴等には田には田を、つてな？」

リンは後部座席にある細長い包みを指差した。

「あら、そんな良いものあつたのね。」

それを見た山中はかなり満足げだ。

（女つてのは怖いぜ）

包みの中身を知つているレイは渋い顔をしてリンがルーフに上がるのを見上げた。

：護衛トラック荷台。

一人の男が、TOW発射の準備をしていた。

「あとは標準だけか…」

男がスコープを覗き込むとさつと同じように女がハマーの屋根に陣取つていた。

「ふん、M2を撃とうつたつてその前に火だるまだぜ。」

男は嘲つたがあることに気づく。

（…？違う女か？）

さつきまでルーフに陣取つていた女は美人だったが、若いとは言えないヤツだった。

しかし今スコープにうつるその女はどうみても十代。おまけに大胆な服を着ている。

（ヤバい…タイプだ）

鼻の下を伸ばしていたが、その女が何かを担いでいることに男は気づく。

： 冷たい旋律が背中を走る。

バシュッ

「……………アツ、 R P G ! ! ?」

手遅れだつた。若い女が担いでいた筒から白い煙が吹き出る。

男の叫びに反応した他の者が振り返つたときには、もう放たれた RPG 対戦車ミサイルは荷台に飛び込んでいた。

ズツガアーーーン！

積まれていたTOWミサイルに引火し、荷台にいた男たちは肉片と化す。

皮肉にも火だるまになつたのは護衛車だつた。

「一一台目、爆殺！」

大声で叫びながらリンは歓声をあげる。

被弾したトラックはよろよろ走りながら中央分離帯に激突し、派手に燃え始めた。

「…ガガ…応答せよ…応答せよ…くそつ…ザザ…」

傍受無線からはリーダーらしき声が虚しく響いている。

「ついに最後の一両か！」

ルーフから降りながらリンは最後に残った大型車、ハマーを睨み付ける。

東柴社のトラックとレイ達の乗ったハマーとの距離は30mあるかないか。そのトラックにぴたりとつよいに護衛側のハマーが寄り添っていた。

「ハマーとなると少しきついわね。」

山中はひもめんどくさうに言つ。

「またRPG使うのか、ボス？」リンはこの武骨な対戦車ミサイルが使いたくてたまらないらしい。確かにスッキリ爽快な破壊方法だがいさか過激すぎる。

「せう思つのは山々だけど、敵サンはせてくれないみたいよ？」山中はせう言つて座席にしつかりつかま。

「どういう意味 「対ショック体勢！」！」

普段は静かに話す村仲が珍しく叫んだ。

「ウーーン、ズガーンッ！」

接近するエンジン音、鉄と鉄がぶつかる音と共に、凄まじい衝撃がハマーを襲つた。

「…ちつ…」

村仲が華麗なハンドルを握りで車体を安定させる。

「つてえ！なんだつてんだ！！」

おでこを押さえながら泣きそうな顔でリンが悲鳴を上げた。

見ると明らかに腫れている。衝撃で何処かしらにぶつけたらしい。

「親分さんのお出ましつてか、乱暴だぜえ」

とつたに身近に有つた取つ手を掴んで難を逃れたレイは車の右側の見て驚きあきれた。

「体当たりなんてありかよ～」

レイたちのハマーのすぐ隣にさつきまでトラックにくつついていたはずの護衛ハマーが並走していた。

村仲が運転するハマーとは車色や細部は大分異なるが、確かに巨大なハマー。

そいつが近づいてくる。

明らかに衝突進路だ。

「おっさん、避けろー！」

リンが叫ぶ。

無理な話だ。いくら太い幹線道路を走っているとはいって、元々巨大なハマーが一台並走しているのだから逃れる余地がない。

ズギヤツ！ バギバキッ…

再び鋼鉄の怪物同士が衝突する。BH側のハマーは大いに揺れ、歩道側に押し出された。

ハマーの巨体がガードレールをひん曲げ、街路樹をなぎ倒す。

「…ゲホッ…、こりやないぜ～」

激しい揺れに翻弄されながらもレイは拳銃を抜く。

「喰らいやがれ！」

カンツ カンツ

なんとも情けない音をたてて拳銃弾はいつも軽く弾かれた。

「さすが世界に誇るハマーね。傷すらついてないわ」
皮肉つたように山中は言った。

「冗談じゃねえ！ RPGを「無理よ。」

騒ぎ始めたリンをいざめるように山中が制した。

「この揺れでルーフに上がつたら落下決定。一台のハマーの下でミンチ決定ね。ハンバーグが作れるわ。」

恐ろしいことを平氣で言つ山中。ミンチになるのは事実だが、みんなが大好きハンバーグで例えないので欲しい。

「じゃあどうしろってんだ、ボス！？」

今度は頭を抱えて暴れ始めた。

「少しば落ち着きなさいな。銃は銃、車は車の専門家に任せるのが一番。」

そう言つて村仲に視線を送る。

ミラーでそれを見た村仲はほんの少し口角をつり上げた。

「…任せろ…格の違いを見せてやる…」

ブウーッン…

再び相手のハマーが近づく。

今度ぶつけられたら完全に歩道に乗り上げてしまうだらう。このス

ピードで突っ込めば大惨事だ。

「ハハツ、同じハマー同士だ。先手必勝だな！」

至近距離に迫った護衛ハマーの運転手が怒鳴る。声からして無線で聞いたリーダーだ。

「…………。」

村仲は無言だ。

「ハマー同士で負けるのは悔しいだろうなあ！」

最後のセリフだと言わんばかりに張り上げると、リーダーの男は更にぶつける体勢に入つた。

「……あんたは一つ誤解をしていろや……」

やつと村仲は口を開く。

「なに？」「

「……この車はただのハマーじゃないんだ……」

めいいっぱいにアクセルを踏む。

ギューン…

「……こいつはM1109ハンヴィー…」

十分に加速したところでおもむろにハンドルを切る。

「……重装甲型ハマー……アメリカ軍装甲車そのものだ。」

巨大なM1109の車体が護衛ハマーに迫つた…

メキヤツ…

ガンでもドカンでもなかつた。

何かが引き裂かれる音。

インパクトの時に咄嗟に田をつぶつたリンを待つていたのは、想像しえない光景だった。

「ハマーが…」

まるで空き缶か何かのようになに護衛ハマーの外郭がめぐれ上がつていた。

リンたちが乗つているBH-1側のハマー、正確にはM1109ハンヴィーの装甲の角がもうひとつハマーに深く食い込み、それを哀れな姿変えていた。

「…ふん…小僧が…」

村仲はさも興味がなさそうに、相手側の運転席にいるリーダーを見た。

彼は、すぐ背後で起きた惨劇に開いた口が塞がらなくなっている。

「…終わりにする…」

そのままハンドルをゆっくり切つた。

ぐぢやぐぢやになつたハマーは中央分離帯に近づく。

何をしようとしているのか感づいたリーダーらしき男は、我にかえると脇田も降らず、スクランブルと化したハマーから飛び降りる。高速で移動するハマーから落下した彼はしばらく転がつて動かなくなつた。

彼が飛び降りた瞬間、激しい火花が飛び散る。

ギャギャギャ―――メキッバキッ――

背筋が凍るような音をたてて鉄の怪物が潰れた。

村仲が操るM1109がハマーを中央分離帯に押し付けたのだ。

「…ふん…他愛もない…」

ハンドルを戻しながら無表情で呟く。片手でタバコを取り出すと、火をつけた。

「えげつないわね。ペシャンコよ?」

「…実力差だ…」

村仲は更にアクセルを踏み、本来の目標 東柴口門のトラックの横につけた。

「やつと標的ね…、面倒臭いったらありやしない。村仲、レイようしくね?」

山中は腕を組んで呼び掛けた。

「「了解。」」

煙草をくわえながら再び村仲はハンドルを握る。

中央分離帯に押し付けるようにハマーをトラックに近づけた。

「さつひと終わらせるかあ~」

愛用のベレッタのリロードをすると、ハマーの窓を開ける。すぐ近くにトラックの運転席が迫っていた。

ガンツ、ガンツ、ガンツ、ガンツ、ガンツ、ガンツ~！

ほとんどゼロ距離で発射された9mm弾はトラックの側面窓ガラスを叩く。

防弾ガラスだつたが、さすがにの距離では防ぐことは出来ない。窓ガラスは砕け散つた。

「トラックの運転手！今すぐトラックを止めなあ？」
大穴と化した窓から運転手に向かって叫ぶ。

「ふざけるな！消えろ！」

運転席から銃弾が飛来する。ハマーの車体をかすった。

「どうする、ボス？」

ベレッタを握りながらレイは振り返る。

「“排除”するだけよ」

「…あいよ。おっせん！」

レイに呼ばれた村仲はハンドルを切る。

装甲車をも潰す鉄の怪物がトラックを中央分離帯に押し付けた。
激しい摩擦音を響かせ、火花が散る。

レイはハマーの窓から手をだし、トラックの中に向けた。

突き出された漆黒のベレッタM92Fが鈍く光った。
それを見て明らかに運転手は動搖した。

「黒いベレッタ…！お前まさか…？」

その言葉がトラック運転手の最期となる。

「じゃあな。」

バーンッ！

トラックの窓ガラスが赤く染まる。
拳銃弾は運転手の頭を穿つた。

「いつちゅ上がり～。」

ベレッタを懐にしまいながらレイはため息をつく。

「…お疲れさん、村仲！車を止めて。」

「…ア解した…」

山中に言われるまでもなく、更にトラックを押し付ける。
オレンジの火花が噴水のように上がり、トラックとハマーは停車した。

「さてと…村仲は依頼主に報告ね、後は下車して東柴社トラックを確保！」

奪い屋、BHのメンバーはそれぞれ車を降りた……。

生き残るために奪う。足りなければ奪い合えばいい

それが俺達の街のルールだ。

奪われた者は消える。それもこの街のルールなのだ。

荒廃し続けるこの街で

俺達は今日も奪い続ける…

【四】 scratch away from them - (後書き)

「後書き劇場」

レイ「やつと一緒に仕事おわったなあ～」

リン「実はまだメインキャララが出てねえんだよ。馬鹿作者め

レイ「えっ、誰が出てないの？」

リン「傍受無線作ったアイツだよ！」

レイ「ああ～、引きもつかあ！」

？？「おっ、俺ハ断ジテ引キコモリジャナイゾー！」

レイ「出やがったなあ～、二ート野郎ー！」

リン「えー、二ート野郎については次回出演…by作者…らしい

レイ「こんなひきこもりが気になる方は次もよろしく～

？？「オイッ、勝手二オワルナ…ぶちつ

後書き劇場終了

～登場人物紹介～（前書き）

今さらですがキャラ紹介追加しましたwww
小説を書く上で基本設定みたいなもんで、本文に書いてないこと
も載つてます(、・・・)悪しからず
いづれは挿し絵をつけたいと思います

（登場人物紹介）

> 110939 — 1313 <

神崎 零 “Gunner”

奪い屋 “Black Hold Uppers” (BHU) の雇われ銃使いの少年。

黒髪黒眼の典型的日本人。かなりの面倒臭がり屋で、容姿もハネた髪の毛、乱れた服装とテキトーさが目立つ。

しかも時間にルーズだという完全なダメ人間。

しかしガンマンとしては優秀で、BHUが事務所を構える旧溝ノ口エリアでは、その銃さばきとテキトーさを知らないものはいない。

いわくつきの愛銃

“ベレッタM92Fカスタム RAVEN CLAW”

を握り、BHUの主要メンバーを成す。

平穏時代の終焉の混乱で孤兎となる暗い過去を持つが様々な事情により、奪い屋のボス、山中に拾われ今に至る。

RIN “S o l d i e r”

ストリートチルドレン出身の暴力女子。

奪い屋B H Uの戦闘員。

茶色がかつた髪をポニー テール風に束ね、露出度の高い大胆な服を着こなす。

大人しくしていれば誰でも可愛いと言われる容姿なのだが、その粗野な言動と男勝りの活発さが全てぶち壊している。

本人は気にしていないのでなお悪い。

性格は言つまでもないがスッキリ爽快簡潔なことを好む。

好物はあんまん。旧武藏溝ノ口駅の闇市では、毎回と言つていいほどこれを買つている。食べる速さは30秒／個。

さすがは元ストリートチルドレンとあって何でも扱えるオールラウンダーだが、特に体術には自信がある。実はレイと違い、時間通りに行動する。ボス山中に蜂の巣にされかけたことがあり、それ以来トラウマになつた。

物心ついたときには既にストリートチルドレンだったので、自らの出自を知らない。

唯一首にかけてあつたアクセサリーに中国語が刻んであつたことから、その文字から取つて自らをリンと命名した。

13歳にしてストリートチルドレンの大将になつたことはリンの武勇伝の一つに過ぎない。

山中 智美 さとみ “ B O S S ”

文字通り奪い屋“ BHU を束ねる最凶のボス。

長い長髪を背中で束ね、スラリとしたスースを完璧に着こなす美人
⋮⋮⋮
に見える（笑）

普段は淑女的口調で話すが、中身はかなり黒い。その恐怖で BHU
内の馬鹿二人（レイ、リン）を支配している。その怖さを“ 見た目
はレディー、中身は悪魔”と称したレイは、その次の瞬間血まみれ
になるという経験を持つ。

普段から威圧感を振りまいっているので分かりにくいが本気で怒ると
恐ろしく冷酷になり、問答無用で鉄槌を下す。

元軍人。

某外国人部隊に所属し、女性士官として血で血を洗う紛争をアフリ
カでしてきた。現地でもその優秀さは並ぶものではなく、若くして小
佐まで登り詰めた。

自衛官の夫がいたが、平穏時代の終焉により自衛隊が消滅し、行方
不明の後に死亡とされる。

祖国日本的一大事を知り軍を抜けて帰国するが、待っていたのは夫
の死だった。⋮つまり未亡人。

ボスという指揮官的な立場ながら戦闘もこなす。

武器としては機関銃がお気に入り。本人は火力こそが最重要だと信

じる。鍛えぬかれた（？）その腕は、軽機関銃なら「手で撃てるほど。

年齢をかなり気にしており、彼女の前でそんな話をしようものなら、
12・7mm弾が飛んでくることだらう。

趣味が裁縫という相反した部分もある

村仲 理儀 “Driver”

奪い屋“BHU”的ベテランドライバー。

白髪混じりの短髪のおっさん。

無表情かつほとんど無口。自ら発言はあまりしないが、圧倒的な威
厳をもつハートボイルドな紳士。

かなり地味な背広を着込み、そこのおっさんと大差ないよう見
えるが、驚異のドライブテクを備えている。

BHUの古参で山中とは平穏時代からの付き合いがある。平穏時代
にはトラックドライバーだったらしい。

愛車はアメリカ軍御用達装甲車ハンヴィー。

ハンヴィーを民間用に販売しているのが高級車「ハマー」だが、村
仲が運転しているのはれっきとした軍用車。

ただし軍用車だと目立つので、ハマーに見えるような偽装を施して
いる。

ちなみにハンヴィーには様々な種類があるが、村仲のは「M110

9」という重装甲型。コンクリートの壁も突進だけでなき倒す鉄の怪物www

重度のヘビースモーカー。

毎日かなりの量を吸つていのうだ。BHの事務所には村仲用にタバコの備蓄がある。

タバコの銘柄はマイルドセブン。

タバコがなくなると……

趣味はラジコン。

模型自動車や模型飛行機を手足のように動かす。

中田 悠次 “Weapon dealer”

“旧”武藏溝ノ口駅商業複合施設“NOCTY”に居を構える「H クストラ・オーダー社」支店長の武器商人。

黒いスーツがバツチリ似合つ若じお兄さんだが、金への執着心と腹黒さはハンパない。

本人いわく、

「金さえあれば何でも売りますよ？何でもね。」

口調は常に一寧で、営業スマイルを振り撒く。

しかし中田の本性を知るものにとっては恐ろしいの一言に呟かれる。

国際的なコネを異常なほど持つており、彼の店には世界名国の兵器が並ぶ。

無法の街、溝ノ口を牛耳る者の一人でもある。

埼山 司 “Informér”

“旧”武藏溝ノ口駅闇市場で情報屋を営む青年。表の顔として八百屋を経営しているしつかり者。

優れた情報家として裏家業の者たちの間に知られている。

Tシャツにジーンズと何ら一般人と変わらないなりをしているが、情報収集能力は抜群でインターネットはもちろんそこらの噂話までも情報源とする。

調査屋も兼ねており全く情報がない場合でも、徹底的に調べて情報とする。

普通の青年の印象からは考えられないが、身体能力はスペイ顔負け。体術も心得ている。

子供の頃、両親が暴漢に銃殺され、それ以来銃が苦手に。“情報屋”に銃は要らない”といふまかしている。

実は、覚えることが苦手。とにかく情報になりそうることはメモ。

～登場人物紹介～（後書き）

どうでしたでしょうか？

自分は受験生なんで更新遅れるかもしだせんが

少しずつでも更新していくんで、読んで頂ければ幸いです（ 、 、 ）

感想は24時間募集中です

ではまた次回？

【五】 It will be raining, but : & it :

ども「ワニックす、 、 、 ）

今回からBENJのお仕事（？）が始まります（ 、 、 、 ）

一話が長いんで小分けにして投稿します

ではどうぞ、（ < ^) /

【五】 It will be raining, but ... & it ...

何回転んだつていいさ 擦りむいた傷を ちやんと見るんだ
真紅の血が輝いて「君は生きてる」と教えてる
固いアスファルトの上に 雰になつて落ちて 今まで バレをバレ
やつて 歩いてきたかを教えてる
何回迷つたつていいさ 血の跡を辿り 戻ればいいさ

目標なんて 無くていいさ 気付けば 後から付いてくる
可能性という名の道が 幾つも伸びてるせいで
散々 迷いながら どこへでも行けるんだ

大事なモンは 幾つもあつた
なんか 隨分 減っちゃつたけど

ひとつだけ ひとつだけ その腕で ギュッと抱えて離すな
血が叫び教えてる「君が生きてる」とこつ血葉だけは.....

.....出典、 BUMP OF CHICKEN 「ダイヤモンズ」
より抜粋。

雨が降っている…

灰色の空、群青色の海。

殺風景な港には一隻だけ古びた貨物船がある。

小さな少年は男に手を連れられ、その船に乗った。

船に挙げられた赤と青の国旗を見上げて、その男の子は問う…

「どこに行くの？おじさん。」

「海の向こうだよ。」

男はそう言つて顔をうつむけた…

雨が降つてゐる…

暗い海から船がやつて来る

廃港に入港したその貨物船は、一人の少年を降ろして再び去つていつた。

「日本、か…」玄く声が吹き抜ける海風と小雨の中へ散る。

灰色の空、群青色の海がどこまでも広がつていた……

「…………おい…………おい、レイ…………」

誰かの声が聞こえる…

俺を呼んでいるのか？

俺の名前はレイじゃない。その名はとつぶし捨てた。

俺の名は

「…………レイ、起きろってんだ！」

突然腹部に衝撃が走る。

夢の世界にたたずんでいた俺 神崎 零は無理矢理現実世界に引き戻された。

「…………レイ、起きろってんだ！」

夢の光景は歪んで一瞬で消え、見慣れた女の子の顔がおぼろげに目に浮かぶ。

が、次に目に映つたのは高速で打ち下ろされる拳だった。

メキヤツ！

「爽やかな朝にしては、ちと荒々しくないすかね、リンさんよお？」

打ち下ろされた鉄拳はベッドを強打した。

間一髪、レイは頭をすらり回避したが音からしてスプリングがイカれたことは間違いない。

目をこすりながら、呆れた顔を暴力少女に向ける。

「あれ…避けたのか？結構本気でやつたのに」

案外痛かったのか、手をヒラヒラさせながら陽気な表情で言いやが

る。

(…あれを被弾してたら人生最悪の日覚めだ)
レイは自分の反射神経に感謝した。あの威力は鼻血程度では済まないだろう。

「…ふわあ…今何時だよお?…どうせまだ7時…」

大きなあぐびを噛み殺しながら俺はリンに聞いてみた。

「ふん、自分で確かめるんだな。」

にやにや笑いながらリンは近くにおいてあつた日覚まし時計を放つてよこす。

ちなみに時計は壊した日の夜に買い換えた。またいつ壊すかわからぬいが…

「 ょうと…」

器用に、飛んできた時計を掴むとのぞきこむ。

長針と短針のなす角は60°だ。

つまり…

「ちよ…………10時かよ!…今日仕事か!…?」

一気に覚醒したレイは壁にかかったカレンダーに急いで目を向ける。

June (6月) と書かれた月のページ、今日の日付にちの欄には何も書かれていない。今日はオフの日だ。

「なんだよ〜、オフじゃん今日…」

焦つて損したようなボケ顔でレイは振り返った。

「バッカ野郎、この前の仕事の結果忘れたのかよー。」
リンは身を乗り出して怒鳴った。

「報酬金を支払わない、ですってー!？」

山中がらしくない声を上げる。

東柴輸送隊を殲滅させた、山中率いるBHJは意氣揚々と依頼人の元へ向かった。

もちろんトラックに大量に積まれたメモリーカードやらCD-ROMなどの記憶媒体をかっぽらつて。

レイにはあまり詳しくないが、相当な情報が詰め込まれているのは分かる。

何しろトラック一台分、CD-ROMだけでもゼットと500枚。そいつを依頼人たちの前に差し出して確認をとらせてている最中にそれは起こった。

「私たちが求めるものはこれではない。よって私たちが金を払う義務はない。」

いかにもビジネスマンといった代表らしき男が、CD-ROMの一枚を指しながら言い放つ。

どうやら狙っていた情報と違つらしい。しかしその高圧的な物言いは俺たちを見下していた。

「ふざけるなよ、オッサン! 言われたものを持ってきたんだ、払うもん払え!」

顔を真っ赤にしてリングが食つて掛かる。見下されているのはともかく、契約違反をされるのはたまらない。

「知らないな。契約内容と違うものなのだからこれはそちらのミスだ。」

居丈高に言つそいつにリングはブチ切れそうになつたが、村仲に止められた。

「…それがそつちの言い分なら… しょうがない。しかし我々が奪取したトラックと記憶媒体は返してもらつぞ?…」

タバコをくわえながら椅子に座つていた村仲が反論する。これは正論のはずだ。しかし、次に帰つてきたのは驚愕の言葉だった。

「それについてはわが社が引き取らせていただく。あなた方がこの契約に失敗した違約金としてな?」

グシャ

村仲は燐らせていたタバコを潰した。こめかみに青筋が浮き出ている。それでも掴みかからないのはこの人が紳士だからだ。にやにや笑いながらそのビジネスマン野郎は脚を組んだ。後ろに座るそいつの部下たちもくすくす笑つていた。

(「コイツ、俺たちをバカにしてるのか!?」
露骨に顔をしかめながらレイは懐に手を伸ばす。
隣のリンも爆発寸前だ。)

しかし火蓋を切つたのはその三人の誰でもなかつた。

ブチイツ！

何かがキレる音がした。

三人の後ろからだ。
後ろにいるのは！

今まさに得物を引き抜かんとしていたレイとリンは硬直した。この音は何度も聞いたことがある。

リンなど真っ赤だった顔が信号機並みに青くなっていた。

俺たちは忘れていた。

B H Uで最も危険な人物を。

俺たちはゆっくり、ゆっくり振り返った。

（（あ……悪魔……））

俺たちのボス、山中は満面の笑みを浮かべていた。それはもう三回目。

しかし俺たちは知っている。

その目が全く笑っていないことを。

「……あら、そういう考え方をなさるのね？」
静かに、しかし何かとげを含んだ言葉が発せられる。

「もちろん、わが社の利益が第一です。」

ビジネス野郎は何を勘違いしているのかさらば焼つた。コイツには目の前で起きていることに気づいてないのか…

「…やう。残念、ふふつ…とつても残念よ?」

くすくす笑う山中。

「…………?」

やつビビジネス野郎は異変に気がついたらしく、でももう遅かった。

ジヤキッ!

「喧嘩を売るところを間違えたみたいね……」「生きて帰ると悪いな」

口調が変わった山中の手には愛用のM16A1軽機関銃が、いつのまにか握られていた。

「なつ、何を?」

ダダダダダダッ!

血溜まりに薬莢が転がった…

「あ~、思い出したあ。てか思い出したくなかったぜ。」

あのあとはかなり酷かつた。依頼人たちを挽き肉にした山中の機嫌は最悪。

リンもかんしゃくを引き起こしていたので、村仲とレイの男一人で女性衆を引きずつて帰つたのだ。

トライックに満載した情報の山も仕方なく持ち帰つた。レイやリンに

「つまつぱじみの日に等しげが、これをどうにか金に変えないと、仕事の報酬は〇だ。

つまりB-Hに雇われているレイにとっては給金〇を意味する。

「ヒロとかメモリとかなんやは俺の能力外だからな。帰つてねちまつたけど、あのガラクタどいつなつたんさ?」

ベットから起き上がり、レイは冷蔵庫を漁る。

しかし空っぽに近い冷蔵庫からは干からびたサンドイッチしか見つからなかつた。

（まずい…まずいぜ…餓死する…）

財布の中には小銭が数枚、とても生活出来ない。

レイはこの性格なので貯金など全くしてなかつた。

簡単に言えば、給金がなければこの一週間でレイは、サンドイッチ同様干物と化すだろ?。

そんなジ・エンド真つ平〇めんだ。

「残念だけどあたしもあの小難しいのは苦手なんだ。ボスと村仲のおつさんが深夜までずっと調べてた。よく知らないけど確かに“平穏時代”関係じやないらしいな。」

考えるだけでも頭が痛いと言わんばかりに頭を押さえながらリンは言った。

レイはできと一過ぎて情報系に適していないと自覚しているのだが、リンはとこうと…

（つまるところ頭がわるいんだよな）

これが確実な理由だろ?。

ブンツ、バキッ！

「レイ、お前今すぐえ失礼なこと思つたる?」

リンのすらりとした脚が飛んできた。

ひょいと避けたレイだつたが、リンの正確な回し蹴りは最後の食料かぴかぴサンドイッチを窓の外へ蹴り飛ばした。

「ちょ…おまつ…最後の食料だぞ！」

いつから待機していたのか大きなカラスがトンビのじとく、空中に飛び出たサンドイッチを引っ付かんで飛び去った。

「最後のくじもの…」

「フンッ、いい気味だ」

呆然とするレイを尻目にリンは氣が清々したこのよひだった。

「はあ……で、ボスはどうしたんだって？ あとベビースモーカーのオッサンは？」

無論村仲の事だ。1日3箱吸うのだからかなりの重症。あんな大量のタバコを買う金はどこから出るのか。

実直な性格のあの人人の事だから、山ほど貯金があるに違いないと割り切った。

「オッサンはハマーの整備。ボスはあの邪魔なガラクタ共を詳しく調べに……ヤツのところへ行つた。朝からね。」

リンは腕を組んでベットの端に腰掛けた。

「ヤツ…………ねえ……」

B H C の情報系担当、声しか聞いたことのないあいつを思い浮かべる。

「よし、ヤツのとこへいこうかあ。俺の未来がかかってるんだ。」
真面目なのがバカなのかわからない理由だが、動かないことにはし

ようがない。

「じゃあ事務所で待ってる。一度寝しないでちゃんと来いよ？」
いつまでもパジャマの青年にリンは釘を刺すと、リンは部屋を出で
いった。

「何で一度寝するってわかるんだよ？」

この男は絶対寝るつもりだつたに違いない。

またあくびをしながら、ハンガーに掛けた愛用シャツを手に取る。

（ しかしまたあの夢を見るとはねえ… ）

無駄に眠い理由はわかつていた。

夜更かししていたからではない。

リンに殺人まがいの方法で起されたからでもない。

…あの夢だ。

あの夢を見るとときは決まって寝た気がしない。

（…とつぶに忘れたつもりだつたんだけじね～）

いやつても消えないラクガキの様に、頭に染み付いて消えない夢。

頭を掻きながら、レイは忘れよつと努めた。

…決して忘れられない過去なのに。

【五】 It will be raining, but ... & it ...

お待たせしました(・・・) ブラックです

ちょっと忙しくて更新が遅れていきました(泣)

今日はアクションなしですが読んで貰えれば幸いです(・・・)

あと、登場人物のところに挿し絵を実験的に配置ヽ(^ ^)ヽ

他の絵も書いていくんでよろしくです

ではどうぞ

【五】 It will be raining, but : & it :

一体どれくらいの間 助けを呼ぶ声を 無視してんだ

その背中に張り付いた 泣き声の主を 探すんだ

前ばかり見てるから なかなか気付かないんだ

置いて行かないでくれって 泣いて すがる様な SOS

聴いた事ある 懐かしい声 なんか随分 大切な声

ひとつずつ ひとつずつ 何かを落っことしてここまで来た

ひとつずつ 捨つタメ 道を引き返すのは 間違いじゃない

出典、BUMP OF CHICKEN「ダイヤモンド」より
り抜粋。

溝ノ口エリア駅前地区

ある雑居ビルにBHのボス、山中智美は居た。

「ねえ、まだのかしら? もう一時間経つわ。」
イライラしたように呼び掛ける。

しかしその相手の姿は見えない。
代わりに部屋の奥の鉄製ドアから何かが聞こえた。

「…待ッテクレ、セキュリティガ堅インダ…デモモウ少シ…」
聞こえてきたのは、人の声を真似た合成音だった。性別の区別さえつかない異質な機械音…何度聞いても嫌な音だと山中は思っている。

「セキュリティねえ…そんなに厳重に何を隠しているのかしら?…」
自慢ではないが、山中は自分で結構情報処理ができると自負していた。

そうでなければとも一企業の責任者はつとまらない。

その山中が全く歯が立たなかつたのが今回の戦利品、大量の記憶媒体だ。セキュリティが厳しく、パスワードと暗号化がいくつもかけられている。

今の時代、情報は金に等しく価値があるものだが中身を知らないのでは、価値もつけられないし、誰に売つていいのかもわからない。
ただここまで厳しいガードが施されているなら必ず価値ある情報
だと山中は考えていた。

徹夜同然に解析を続けたが、全く進歩がない。

そこで山中はプロに任せることにした。

自分の会社の一員であるはずなのに素顔すら知らないこの天才ハッカーに。

腕だけは信用できるが、人としては信頼できない。

今はそういう時代だ。気安く心を許せる時代ではないのだ。

「 “K”、早くしてちょうどいい」

「ソウ急カスナ、後1分30秒で解析ハ終了スル」

“K”と呼ばれた姿無き声はイラついた感じに聞こえた。

「じゃあ後少しね、中身が気になるわ…」

そう言つて山中は暇そうに視線を泳がせた。

この部屋には装飾品と言つものが全くない。

薄暗い室内には中央に簡素なテーブルとパイプ椅子が置いてあるだけだ。

他には何もない。驚くことに塵やごみもひとつも落ちていない。なんていうのか、人が住んでいるような空間ではないのだ。

部屋でただ目立つのは、入ってきた反対正面にある重厚な鋼鉄製のドアが取り付けられていて、山中がいる方からは開きそうになかった。

“K”の声や途切れることのないキーボードを叩く音がその向こうから聞こえてくる。

山中はその向こうに入ったことはなかった。

、ピィー、ピィー、ピィー…

ありきたりな電子音が殺風景な部屋に響く。

「パスワード解除、暗号解析完了……ボス、全テ終了シタヨ」
再び人工的な声が言った。

「礼を言つわ、 “K”…。私じゃ手がつけられないもの。」
昨日の夜の解析のせいで彼女の目は真っ赤に充血し、隈がはつきり
と出来ていた。

恐らく彼女の形相は相当壮烈なものだろう。
レイが山中に合つていたら腰を抜かしたに違いない。

「世辞ハ要ラナイヨ、ボス？」

「謙遜するのは良くないわ、こんなこと出来るのは私の知つてゐる限
りあなただけよ。」

「確力ニコレヲ解析出来ルノハアマリ居ナイ……………デモ、コノ情
報…………町ノ連中ニ知ラセタ方ガイイ」

「……なんですって？」

「見レバワカル」

鋼鉄製のドアの向こうで、何か音がした。

ドアの方のからだ。

ちょっとした小窓が付いており、ガコッという開閉音と共に開いた。
小窓の向こうには底知れない闇が佇んでいた。

山中はふとなかを見てみたい気持ちにかられたが、その小窓から例

のCD-ROMが出て来たので、そっちに興味は戻った。

ガラガラ… という音と共にケースに入ったそれがいくつも出てきて落ちる。

最後に分析結果らしい紙の束がひらりと出てきて、そのCD-ROMの山の上を舞う。

ガチャン！

小窓が閉められたのはそれと同時だった。

紙の束を引っ掴んで、山中は貪るように読んだ。

「！」、これって…………

「カネ二ナル情報ナンカジヤナイ、コレハ危険ダ」

「…[冗談にできる話じゃないわ、連絡よ」

彼女は紙の束を粗末なテーブルに叩きつけ、携帯電話を取り出した。

「…“会議”を開く必要があるわね…」

彼女の知っている人々に片っ端から電話していった。

テーブルの上に乱暴に置かれた書類には、ひとつつの国旗が見える…

赤と青のストライプ（縞）…青地に浮かぶ数多の白星…

【United States】だ…

「…で、これはどういう状況なのかな？」
事務所に着いたレイは途方に暮れていた。
事務所の中は、想像を絶する光景だった。

目の前に広がるのは、書類、本、CDケースの山…
一面に色々なものが散乱している。まるで下手な泥棒が入ったみたいだ。

「…山中のヤツだ…」

書類の山だと思っていたものがモゾモゾ動く。よく見れば煙が出ている。火事…出はない。鼻をつく臭いはタバコのそれだ。

「つおあつー？ 村仲のオッサンか？」

誰も居ない空間に問い合わせただけで答えは期待してなかつたので、レイはこきこきビックリした。

「…ああ、車のメンテを終えてソファで昼寝していたら」のぞまだ。
まったく…」

村仲がゆっくりと起き上ると無数の書類がバサバサと落ちてゆく。
「何があつたのさー？」
レイは村仲とテーブルを挟んで向かいのソファに座った。テーブルの上も書類に占領されており、邪魔なことこの上ない。
書類を一つ取つて見てみたが、難解な数式の羅列が続く意味の無いものだった。

「…」の前の件の膨大な情報を…

「あ～、そこら辺はリンから聞いてる。「レイは話を遮った。

「… そうか… なら話が早い。山中が分析をしていたんだがな、コンピュータウイルスが紛れ込んでたらしくて情報機器が全部イカれたと山中が嘆いていた。その後であれだ…」

村仲が一旦話を切つて部屋の向こうを指差す。
その先には印刷機が置いてあつた。

「… あれにウイルスが移つたらしい。勝手に大量印刷し洪水みたいに吐き出してこうなつたのだ…」

言い切ると村仲は疲れたかのよつにため息を吐き出す。この人がこんな長くしゃべるのは珍しい。それだけ酷い光景だったのだろう。

「で、ボスは？」

「… 言わなくとも解るだろ？ 我慢の限界でぶちきた。そのまま“K”のところに行つた…」

「あ～、そりや怒り狂うわな…」

「… ヤツは元から狂つているようなものだがな…」

タバコをふかしながら村仲はニヤツと笑つた。
この人とボスの関係は、レイのそれより長い。

昔何が起こつたのか知らないが、良いことではなさそうだ。

「… つてえ あれ、リンは？ ここで待つてる、て言ってたんだけど

「… そういえばまだ帰つてない。一緒にやないのか？…」

村仲が吸いかけのタバコを片手に質問したときだった。

バツアーン！

「すまねえ、レイ！ あんまん買つてたら遅くなつ……つてなんだよ！ この部屋！？」

小脇にあんまんの袋を抱えたリンが、蹴り開けただろうドアの向こうで棒立ちになっていた。

部屋を見た感想がレイと同じなのは、偶然の成せる技に違いない。

「よおー、ヒーハーハーハー

レイが入り口にいるリンに呼び掛ける。

声が聞こえではじめてレイ達に気づいたようだ。

「レイとオッサンいたのか！ どうこうことだよ、これ？」

リンはテーブルまでズカズカと散乱した紙の束を容赦なく踏みつけながら近づいて来た。

テーブルの上にドサッという音をたてて、あんまんの袋が降ろされる。

（こつたいいいくつ食う氣だよ……）

明らかに一つ二つではないことは確かだ。

リンはレイの隣に腰をかけた。

「…？ なんか文句あるか？」

レイの視線に気付いたのか、リンが眉をつり上げて睨んだ。すでにあんまんの一つを手に取っている。

「…い、いやあ、太りますぜ、リンお嬢さん？」

ちやかして笑う。

当然の」とく剛腕（あんまんを持つていない方）が飛んできたので辛うじて避けた。

「ふん、余計なお世話さ。」

しかめ面のリンが言う。すでにあんまんがその手から消えているのは幻覚か…？

「で、どうなのさ？」

リンは先ほどの質問を繰り返した。

「…朝、記憶媒体の分析…」「あ～！めんどくせえ…」
レイが村仲の説明を遮る。あの説明は長つたらし過ぎる。リンなら一言で理解するだろ？

「要するに………ボスだ。」

「ああなるほどね」

レイの一言簡潔な説明で事足りた。

「でえー、リン？なんでここに俺を連れてきたのさ？」

「あつーと…ゴクッ…そつだつた！仕事さ 緊急のな。」

頬張っていたあんまんを無理矢理飲み込むと、機嫌よくリンは言つた。

既にあんまんの袋はしほみかけている。

「緊急のねえ…、依頼人は誰だよ？ボスを通さなくていいのかあ？」
のんきな調子で聞く。本来依頼人との接触はボス、山中がしている。
山中が居ないのにどうやって仕事をとつたのか…。

「ああ、それはな…」

「…俺の依頼だ。悪いか…？」

「村仲のオッサンの依頼！…どういうことだよ？」

村仲が一本目のタバコをスパスパしながら答えたので、レイは面食らった。

「…ガソリンだ。今日のメンテでも確認したがもう貯蓄が終わる…補給しなければ車とドライバーなしで仕事することになるぞ…」

無表情で村仲が言うのでかえつて緊迫感がある。確かに車が動かなければ、彼はお役じめんだ。

「マジかよ…ガソリンがないのかあ～」

「…正確には前の仕事の収入で補給するつもりだったが、ただ仕事同然だったからな…」

吸い終わったタバコを捻り潰し、村仲は唸つた。

「…現物奪取だ。タンクローリーを奪う。…」

「そりや大胆で物騒な…」

レイはあきれたように腕ぐみしてソファの背もたれに背中を預けた。

「まつ、もう埼山の野郎からガソリン関係の情報は買ったのさ。」
リンはあんまんの最後の一つを口に放り入れて飲み込むと、くしゃくしゃに折り目がついた一枚の紙を取り出した。

そいつをレイの目の前でひらひらと振る。

会社らしい高層ビルと小型のタンクローリーが多数駐車している写真が載っている。

ビルの側面とタンクローリーには会社のロゴなのだろう、NEGと描かれていた。

「巨大企業“NEG”。そこに燃料集積所があるんのね」
[写真を指差し、リンは言つ。

「…そいつを奪つ。そのままな…」

「ふうん、情報は確かなのかあ？」

「…アイツの情報は信頼できるからな…」

溝ノ口の情報屋、崎山は情報の信頼度の高さで有名だ。情報は正確さが命なのである。

「外見は小型だがあたしたちの会社で使つては余る量だ。奪つて損はないよ」

「なるほど…やつてみますかあ…」

レイは承諾した。こんなにおいしい話はそつそつない。事は急げだ。

「よし、さつと決まれば早速行くぜ！オッサン、車出せるか？」
ソファから腰をあげてリンが言つ。

「…行きだけだ。ガソリンが足りんからな。帰りはタンクローリーに乗つて帰る。…」

そこまで貯蓄が少ないのかとレイは驚いた。
それならこの仕事は失敗できない。

「…とにかく失敗すれば帰りは歩きだ…」

「りょうかいつ！行くぜ」

リンが我先にと事務所を飛び出していった

続いて村仲がハマーのキーを持って出ていく。

最後にレイが事務所を後にした。

レイは頭上を見上げる。

薄暗い雲が広がり雨が降りだしそうだ

(なんだか天気わりいなあ……灰色か……氣のせいだな)

「おーっ、レイ！ 早くしりょーーー！」

車庫の方でリンが叫んでいる。

「ああ……今行くーーー！」

レイは灰色の空から田を背け、ハマーで乗り込んだ

：

：“あの田”もじと空だと憚て出しながら。

【五】 It will be raining, but : & it :

お久しぶりです(、・・) ブラックす

ちよつと日常生活が忙しすぎてなかなか執筆できませんでした(へ
ーへ。)

徹夜とか熱中症とか盜難とか色々あってwww

とつあえずどうぞ、(<へへ)、

【五】 It will be raining, but : & it :

やつと会えた

君は誰だい？

ああ そういうえば

君は僕だ

大嫌いな

弱い僕を

ずっと前に

こりで置きだりにしたんだ

何回転んだつていいさ 何回迷つたつていいさ

大事なモンは 幾つも無いさ 後にも先にも

ひとつだけ ひとつだけ

その腕で ギュッと 抱えて離すな

世の中に ひとつだけ かけがえのない 生きてる自分

弱い部分 強い部分 その実 両方が かけがえのない自分

誰よりも 何よりも それまず ギュッと強く 抱きしめてくれ

上手に唄えなくていいさ いつか旅に出るその時は

迷わずこの唄を リュックに詰めて行ってくれ

出典、BUMP OF CHICKEN「ダイヤモンド」より
抜粋。

……空は灰色。微かに差し込む陽の光。

次々に流れる群青色の景色。開け放たれた車窓から吹き込む風は、
湿り気を帯びる。

車内で揺られる少年は抗えぬ眠りについていた……

少年は夢を見た。遠い過去のある光景　己の奥深くに眠る記憶だ。

……灰色の空、群青色の街。

黒い銃を手に、少年は人気のない道を歩く。

……頭に叩き込まれた命令　“破壊”、“殺害”、“殲滅”

命令は絶対だ。命令だけが僕の生きる道。僕は命令といつ名の鎖で操られる人形なのだ

僕はコードネーム“〇（ゼロ）”

籠の鳥だ……黒くて不吉な惨めな鳥。

冷たく感情の無い目をした少年は歩き続けた。ただ命令を遂行するためだけに……。

「…………い、…………おー、…………」
レイは自分が揺さぶられているのを感じた。明るくて高いが頭に響く。

「…………レイ…………起きる…………」

レイ？俺の名前はレイじゃないって言つただろ？俺の名前は“ゼ

「…………そつと起きる……テキトー野郎…………」

ガツ！

突然俺は脳天に激しい衝撃を食らつた。目の前で星が回る。

「あれつ？避けなかつた（笑）」
はつきり目覚めたレイの横には少女がニヤリと笑いながら座つていた。

「……くつそお……いてえ～」

リンの鉄拳は後頭部を直撃したらしい。いつもなら避けるのだが何故か避けられなかつた。

「……レイ……着いたぞ……」

運転席に座る村仲が振り返りながらシートベルトを外していた。車の外は薄暗い。どこかの車庫のようだ。

「……ここに車を置いて置く……」

レイがふと燃料メーターを見るとほとんどのを指していた。

「さつさと降りろよ、レイ？ 一いちどら待ってるんだ。」

リンは既に車を降りていた。例もそれに続いて車を降りる。鎧びた鉄のにおいが鼻をついた。

「ちょ……ひでえにおいだ、ここはなんだよお？」

周りを見渡すと鎧びいた車の残骸が幾つも見える。

「……スクラップ置き場だ。ここなら誰も来ないから安心して駐車できる。……」

「ふうん、なるほどねえ」

しげしげと辺りを見ながら呟く。頭上を見上げると屋根はあらかた崩れて骨組みになつていた。群青色の空が見透かせる。

……不意に何かが顔に当たつた。

手を添えると水滴が付く。一滴ではなかつた。パラパラと連續し

て落ちてきた。

「…………雨か…………」

「…………かくじょう、降ってきたやがったー! おーレイ、行くぞー。
こままだ空を見上げるレイにリンは呼び掛けた。

「…………」

返答は無い。レイはただ空を見上げていた。

「おー? レイー?

「…………ああ…………」

我に戻ったよ! レイは答えた。

「…………お前大丈夫か? なんか変だぞ?」

車庫の入り口へと進むリンは氣味が悪そ! と言つた。

「…………ああ……なんか眠くてなあ……大丈夫だ……。」

頭をかきながらレイはリンの後に続く。

「…………何でだ? あの姫はあのときの…………」

不思議と頭にこびりつゝあの色を振り払つよつてレイは頭を振つた。

「眠氣かよ。心配して揃したぜ。そら、仕事始めるぞ?」

車庫の入り口からは巨大な高層ビルが間近に見えた。

今回のターゲット“NEG”だ。

群青色の空にそびえる高層ビルは、重厚な威圧感を持つていた。

少年は先を行く少女と男性の後を追つた。

はい どうだつたでしょつか?

え? 何でタイトルが「仮」だつて?

いやあ (、・・) 自分の小説は一話が長いんですが...

自分のには早く投稿したいwww

とこう () とやせたらとこにパート3を分割して投稿します (;)

分割した分を全て投稿したら 1つにまとめるつもりです (、)

そんではまたよろしく~

感想その他いつでもうなづけてます~ (笑)

【五】 It will be raining, but : & it :

ほー(、 、 、) ブラックす www

今日は貯めていた分の放出第一段です

今日はガラリと雰囲気が変わります(。)

新キャラもでるんどうりじくすヽ(< ^) /

溝ノ口地区、旧複合商業施設“NOCTY”のある一室……

タバコの煙が漂うその部屋では、何人かの人間がテーブルを囲んでいた。

「それで、山中さん？わざわざ私たちを呼んで、どうじょうと話つのですか？」

薄暗い明かりの下でタバコを吸う男 すらりとスーツを着こんだ武器商人、中田が部屋の中で唯一の女性、山中智美に問い合わせた。

「あなたたちをここに呼んだのは、これの事についてよ」
そう言って山中は一枚のCD-ROMを取り出す。“K”に解析してもらつたものだ。薄暗い光に反射して鈍く光つた。

「勿体ぶらずに早く教えて貰いてえもんだ、我慢は苦手なんでな。顔に傷のある大柄な男が、山中を睨み付けていいはなつ。」

溝ノ口地区暴力団「鬼口会」首領、古林雄也だ。

溝ノ口のやぐざの中では最大の勢力を持つ集団だ。

「フフ……短気は損氣と言つヨ？古林サン。」

洒落たスーツを来た若いハンサムな男性がタバコを燻らせながら言った。狐のような切れ目がキラリと光る。

溝ノ口に蔓延るマフィア、「真義暗」の若頭、義徳助。名前から中国系な雰囲気を醸し出している。

「あんたみたいな口うるさい奴がいるからイヤイやするんだぜ？中華の兄ちゃんよ。」

「気のせいね。むしろ、あなた居て皆さんむさぼしくナイカ？」

「言つじやねえか、中国野郎め……よつほど血を見たいらしけな。二人の間には冷たい視線がぶつかり合っている。まるで火花が出ているようだ。」

古林は甚平の懐をまさぐり、義はスーツのポケットに手を突っ込んでいた。

一触即発の状態だ。

.....
ヒコツ

ズッガアアアン！！

先に動いたのは古林でも義でもなかつた。

長い足がテーブルに振り下ろされ、見事に一つに折れ曲がつた。テーブルに置かれていた灰皿や吸殻、その他様々なものが宙を舞う。

「……御闘争は他でやつてくれないかな。俺は会合に来たつもりなんだけどねえ？」

部屋にいる最後の一人、情報屋、埼山 司だ。

彼はしかめつらで腕を組ながら、無惨に粉碎されたテーブルの残骸に足を投げ出していた。

懐から黒光りする得物を取り出そうとしていた古林と義は、対峙した体勢そのままに埼山の方を振り返った。

「……ふざけんじやねえ……！　このガキがあ……！」

真っ赤な顔をした古林はそのまま拳銃を抜き、埼山に向けた。撃鉄を起こし、引き金に指をかける。

「……若いくせによお、大人の話に口を出すんじや……」

ガチャツ

「……大人なら話を聞きましょうか？まあ、蜂の巣になりたいなら構わないわ。」

立ち上がりつて銃を埼山に向かた古林の背中に何か冷たくて硬い物が押し付けられていた。いつの間にか背後には山中が立っていた。

「 ッ！？」

押し付けられていた物が大型の拳銃だと分かると、古林は息をのんだ。

「 こ」の拳銃ねえ、グロツク一四つていうマシンピストルなのよ。要是機関拳銃、全弾三三発だつたわね」

そう言つて山中はニヤツと笑つた。（悪魔の微笑みだ）

「 おやおや…………荒っぽい」とはやめにしたいですねえ。仮にも私は「こ」の溝ノ口の実力者ですから。」

中田がタバコを指でつまみながら、皮肉つたよつて呟く。

「…………チツ、くそが…………」

古林は義の方を一にらみすると銃をしまつて元の席についた。

「さてと…………話が中途半端になつたわね、今日わざわざ溝ノ口を支配するあなたたちを呼んだのは重要なことについて話し合つためよ。」

「 山中も元の席に戻るとCD・ROMをしまい、分厚いファイルを取り出し、他の三人に見えるようにかざした。

「 ただの厚い書類じやねえか。何を話す必要がある？」

古林は偉そうに言つた。先ほどの一件が気に入らないらしく、不機嫌だ。

「 見た目はどうでも良いのよ、重要なのは中身。」

古林を睨み付けながら、山中はファイルを開いた。

「…………ツ！？」

その場にいた四人は凍りついた。

ファイルの中身の一ページ印刷されたロゴ…………赤と青のストライプに青地の空に浮かぶ白星、そして大きな鷲の紋章…………

…………

「…………アメリカ合衆国…………！」

「…………そう言つわけよ。だからこの会合を開いたわけ。」

山中はそう呟くとまだ記憶に新しい、あの激動の時代を思い出した

“ United States ”

世界に類を見ない、経済力、軍事力、権力、すべてを掌握する超大国。

世界の警察を自負し、第一次世界大戦、二次大戦、冷戦…………と建国以来、全ての戦争に介入してきた国家。

この【二ホン】とよばれる無政府地帯が誕生したときも彼らはやつて來た。

平和的治安維持と称する強制占領…………理不尽な支配と武器を背景とした不可避の暴力…………彼らはそのために來た。

平和的なんかじやない、ただの“チカラ”的濫用だ。彼らによつて支配され、【ニホン】から放たれる情報は、造られた偽物……偽造し修正され、あたかも正常な日常が続いているように

そう、ひどい時代だつた。だから我ら民衆は立ち上がつた。いや立ち上がらなければならなかつたのだ。

密集した都市部でも激しいゲリラ戦、建ち並ぶ建造物を木々に例えれば、これはベトナム戦争の再現だつた。

かつて世界の経済の中心として名を馳せ、【ニホン】の首都として存在した“トウキヨウ”は銃声絶えない混沌な空間となつた。誰もが銃を握り、海の向こうからやつて来た偽りの平和の使者に抵抗したのだ。

長期的大規模で先の見えない戦闘に発展したこの争いはアメリカの首脳にある決断をさせた。

最終兵器の使用

どんな兵器なのは知らない、どんな破壊力なのかも知らない

ただその決断から数日後、

トウキョウは…………地図から消えた。

大量破壊兵器を使つたのか、はたまた別の方法なのかはわからない。

トウキョウの消滅…………それが事実だ。

「狂氣に駆られた民衆からアメリカの若者を守り、【二ホン】の早期復帰を目指すため」

そんな声明が出たことも知らなかつた。

これで抵抗が減ると思ったのかもしれない。

このトウキョウ消滅、後に“東京事変”と呼ばれるこの事件は、むしろアメリカの首を絞めることになった。

怒り狂い絶対排除を誓つ民衆……

あまりの横暴さを危険視した世界各国の世論……
アメリカ国内でも政府に対する怒りが爆発した。正義は地に墮ちたのか、と。

様々な問題を引き起こした軍隊は最終的には去つていった。

彼らがもたらしたのは、破壊と無秩序だけだった。

民衆は自由を勝ち取り、今に至る。

しかし“東京事変”後相当な年が経つても、トウキョウは荒廃したままだ。

「」溝ノ口からも以前トウキョウと呼ばれていた土地を見ることが出来る。

ただ何もない、瓦礫の土地

この土地こそが、我らにアメリカを連想させるのだ……

【五】 It will be raining, but : & it :

どうでしたでしょうか（、・・）

アメリカの部分の物語設定は後付けですwww

実は最初からこの設定だったのですが、冒頭に入れ忘れており、こ
こにスライドイン（；、・）

新キャラについてはパート3が完結したときに改めてまとめて紹介
します（、・・・）マジメ

ではまた次回をよろしく（、・・）～？

狭く薄暗い部屋の中に重い空気が流れた。

誰かしらが持つタバコの煙が、無頓着に各人の会間に広がっていく。

この部屋にいるのは、みなの時代 Peaceful age ... 平穏時代の終焉 を経験したものばかりだ。

あの時代は激しきり、 ... そう、何者も喪失から逃れられな
いほどだ。

沈黙の時間は一瞬だが、今この部屋の中のそれぞれの心ではあの激動の全てが繰り返されていた。

「 まあ、各人思つ」とはあるかも知れないけど会議を続けるわ。」

どうよじとした部屋に山中の声が響いた。

「今回見つかった情報は今衆国のも……それは確かだわ。でも中身はたいした内容ではない——ホンの気象情報やら雑貨の備品状況や」。

今のところ軍事的には何の動向もない。心配する必要はない……

「……つて四つのはあまつちょうこ考えね。」

山中のずいぶんな溜めを含んだ言ひ回しへ、聞いていたものたちは顔をあげて眉を細めた。

「……なんだい？ その言ひ方は、ああ？」

「そんなに氣になる」とがあるひこうのかよ？」

湿氣た煙草をくわえて、腕を組んだ小林は不服そうに吐き出した。

「ふん……貴方の単細胞なお脳じやあわからないかもしけないわね……

「おい……喧嘩売つセ「つるさこわねえ……

貴方にも解るよつ簡単に言つてあげるわ。

疑問はこいつよ

何故こんなひどいいいような情報をスーパー・コンピュータを使って解読するよつな暗号に変換したのか……

しかさその情報を何故東柴社が運んでいたのか……

まあこいつこいつ」とよ。

貴方も街を牛耳るくらいならこれくらいに考えなさい。

「

再び青筋をたてて口を開いた小林を制しながら山中は言い切った。

最後ににやつと笑いながら。

「ぐつ…………毎度毎度見下げたよつて聞こやがつて……

……ある贅い女狐野郎め

「あら、それをこつなら貴方は野生の「ココラ」よ?

それに“見下げたよつて”じゃないわ……

“見下げてる”の。」

互いに顔を突き合せながら言こあつ。

お互いの利き腕が既にポケットの中の獲物を握つていいのは明らかだ。

「ほりほり、口喧嘩なり殴り合いなりは会議が終わつてからにしてくれませんかねえ?」

我らが求めてるのは汚い罵りと飛び交う銃弾ではなく、“情報”。

そう、“情報”なのですよ」

今まで傍観していた中田が煙草に火をつけ、薄ら笑いを浮かべながら口を挟んだ。

「……全く俺も同感だ。

そこの金に汚い武器商人と意見が合ひつとは夢にも思わなかつたけどね。

情報屋の俺としては金に勝るもののが情報なもんで。「相変わらず足を組みながら崎山も呴く。

「私にとつては情報＝金なんですよ」

快活な笑いをあげながら中田がその後に付け足す。

田は笑つていなかつた。

「……ふふ。最もな理由ね。

今ある情報は少ないわ。

それに対しても過剰な反応するのも馬鹿らしといし、完全に無視するの

も危険……」

睨み付けていた小林から目を離し、ソファに深く腰掛けながら神妙な顔で山中は言った。

「…………というコトは…………必要なのは更なる情報、そう『テスネ』？」

足を組んで顎に手を添えながら、義は尋ねる。

「その為の会議よ。各人には情報網の拡大をお願いするわ。」

「…………なるほどな。」

別に街に大きな影響力があるわけでもないのに、俺が呼ばれた訳が解ったよ。」

崎山が両手を首の後ろに回して伸びをする。

「やつこいつ」と。

この街は危うい均衡の上に成り立っている……

あの時代の終焉から興った街よ。

矛盾と混沌を基礎となし、暴力すらも糧として存在する……

この街を守る。

異物を排除し我らが“街”を維持する。

それが私達、力有る者の“raison d'être”
義”よ。

暴力と金を牛耳る私達のね。」

そういうながら山中は各人を見回す。

その目には鋭い光が煌めく。

「ふん 要は影でこそこそしてやがる、顔に覚えのない野郎共を見つけりや良いわけだろ？」

簡単な話だ。」

くわえていた煙草を摘まみながら、小林が答える。

「 単純明快

それが“力”さ。

正直あんたらの誰とも分かりあえるたあ、これっぽっちも考えてねえ。

だがな、“力”は唯一俺たちが同じように持つもんだ。

だから言わしてもうひづ。

俺たち“鬼口会”は

極道の仁と義にかけて

この街に忠誠を誓つ。

それだけだ。

」

そう言つと小林は、部屋の隅に置いてあつたごみ箱に向けて湿氣た煙草を放り、スッと立ち上がつた。

「俺あ先に帰らじてまひりつ。」

「頭を使つのは俺たちヤクザの仕事じゃねえしな」

「新しい情報が入り次第、連絡するわ。」

「貴方とは一度と会いたくないのだけどね」

体を翻し、ドアに向かうその背中に向けて山中は呼び掛けた。

「はあ、さうかい……そんな事あ俺だつて思つぜ、この女狐野郎。」

「じゃあな、他の方々。」

ドアを開けて最後の台詞を吐く。

ガツシャンー！

小林は乱暴にドアを閉め、出ていった。

「………… わてと、

メンバーも欠けたことですし、これ以上ここに話しあわすこともない
でしょう……

自分も帰らせていただきますよ？

仕事を残していくましてね」

立ち上がった中田がスーツの折り畳を正しながら言つ。

「ワタシも帰らしていくだくヨ、山中サン?」

それと同時に隣に座つていた義も立ち上がつた。

「ええ、さつき言つたように情報の件は頼んだわ。

他については後日におつて連絡する。」

二人が出て行つた後、部屋には山中と崎山が残された。

「さう言えば、あんたのところの他の連中はどいつしたんだよ？」

崎山がふと氣づいたように呟つた。

「私無しで仕事にこいつてるはずよ。」

「…………ふーん。

もしかしてガソリン関係か？」

「…………何で知つてる？」

山中が訝しげに鋭い目を椅子に座つてゐる青年に投げかけた。

「…………ああ、リンの奴が此方に来て情報を買つてつたんでね。」

確かにそんな感じの情報だつたはずや」

ズボンのポケットから使い古した手帳を開き確かめながら言つていた。

「…………成る程ね。

「…………何でそんなこと聞くのよ?」

納得げに埼山の返答を聞いた山中は、切り返し質問をする。

「…………よつと考ふるよつに聞を置いて埼山は呟いた。

「…………いや、なんとなくね

嫌な感じがして」

「…………ま、私も含めてB-HJは、いつでもトラブルに巻き込まれて
いるようなものよ」

煙草を取り出して火をつけながら、自嘲氣味に彼女は言つ。

吐き出す煙は薄暗い室内の闇に消えていった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7271m/>

City of chaos

2011年2月24日15時32分発行